

りありて死にけり。智恵なき聖は、かく天狗にあざむかれけるなり。

慈覺大師額額城に入り給ふ事

昔、慈覺大師佛法を習ひ傳へんとて、唐土へ渡り給ひておはしける程に、會昌年中に、唐武宗佛法を亡して、堂塔を毀ち僧尼を捕へて失ひ、或は還俗せしめ給ふ亂に逢ひ給へり。大師をも捕へんとしけるほどに、逃けて或堂の内へ入り給ひぬ。その使堂へ入りて搜しける間、大師すべき方なくて、佛の中に逃げ入りて、不動を念じ給ひけるほどに、使もとめけるに、新しき不動尊佛の御中におはしける、それあやしがりて、抱きおろして見るに、大師もとの姿になり給ひぬ。使驚きて、帝にこのよし奏す。帝仰せられけるは、他國の聖なり、速に追ひ放つべしと仰せければ、放ちつ。大師喜びて他國へ逃げ給ふに、遙なる山を隔てて人の家あり、築地高く築きめぐらして一の門あり、其所に人立てり。悦びをなして問ひ給ふに、これは一人の長者の家なり、わ僧は何人ぞと問ふ。答へて曰

○今昔十一、慈覺大師一瓦唐傳
照密法歸來諸參
會昌年中一層の
武宗の年號、その
の元年は我邦の
仁明天皇承和八
年なり

く、日本國より佛法習ひ傳へんとて渡れる僧なり、しかるにかくあさましき亂に逢ひて、暫しかくれてあらんと思ふなりといふに、これはおほろけに人の來たらぬ所なり、暫くこよにおはして、世しづまりし後出でて、佛法も習ひ給へといへば、大師よろこびをなして内へ入りぬれば、門を鎖しかためて奥のかたに入るに、後に立ちて行きて見れば、様々の屋ども造りつゞけて人多くさわがし、傍なる所にすゑつ。さて佛法習ひつべき所やあると見ありき給ふに、佛經僧侶等すべて見えす。後の方山によりて一つの家あり、寄りて聞けば、人のうめく聲あまたす。怪しくて垣の隙より見給へば、人を縛りて上より吊り下けて、下に壺どもを据ゑて血をたらし入る。淺ましくて故を問へども答もせず、大に怪しくて又他所を聞けば、同じくによふこゑす。覗きて見れば、色あさましう青びれたるものどもの、瘦せ損じたる數多臥せり。一人を招き寄せて、これはいかなる事ぞ、かやうに堪へ難けにはいかであるぞと問へば、木の切を持ちて、細き肘をさし出でて土に書くを見れば、これは額額城なり、これへ來たる人には、まづ物言はぬ藥を喰

あやして一箇ち
して

はせ、次に肥ゆる薬を喰はす。さて其後高き所につり下けて、所々を刺し切りて、血を
あやして、その血にて纈纈を染めて賣り侍るなり、これを知らずしてかよる目を見るな
り、食物の中に胡麻のやうにて黒ばみたるものあり、それは物言はぬ薬なり、さる物參
らせたならば、食ふまねをして捨て給へ、さて人の物申さば、うめきのみうめき給へ、さ
て後に、いかにもして逃ぐべき支度をして逃げ給へ、門は堅くさして、おほろけにて逃
ぐべきやうなしと、委しく教へければ、ありつる居所に歸り居給ひぬ。さるほどに人食
物持ちて來たり。教へつるやうに、けしきのある物中にあり。食ふやうにして、懐に入れ
て後に捨てつ。人來たりて物を問へば、うめきて物もの給はず。今はしおほせたりと思
ひて、肥ゆべき薬を様々にして喰はすれば、同じく喰ふまねして喰はず。人の立ち去り
たる隙に良の方に向ひて、我山の三寶助け給へと、手を摺りて祈請し給ふに、大なる犬
一疋出で來て、大師の御袖を喰ひて引く。やうありと覺えて、引く方に出で給ふに、思
ひかけぬ水門のあるより引き出しつ。外に出でぬれば犬はうせにけり。今はかうと思し

おほろけいおほ
ろけならぬに同
じ

て足の向きたる方へ走り給ふ。遙に山を越えて人里あり、人あひて、これは何方よりお
はする人の、かくは走り給ふぞと問ひければ、かよる所へ行きたりつるが、逃けて罷る
なりとの給ふに、あはれあさましかりけることかな、それは纈纈城なり、彼所へ行きぬ
る人の歸ることなし、おほろけの佛の御助ならでは出づべきやうなし、あはれ尊くおほ
しける人かなとて、拜みて去りぬ。それよりいよく逃け退きて、又都へ入りて忍びて
おはするに、會昌六年に武宗崩じ給ひぬ。翌年大中元年、宣宗位に即き給ひて、佛法滅
すこと止みぬれば、思ひの如く佛法習ひ給ひて、十年といふに日本へ歸り給ひて、眞言
を弘め給ひけりとなん。

○今昔五、天竺
牧羊人入穴不出
成石師

渡天の僧穴に入る事

今は昔、唐土にありける僧の天竺に渡りて、他事にあらず、唯物のゆかしければ、物見
にしありきければ所々見ゆきけり。或片山に大なる穴あり、牛のありけるが、この穴に

入りけるを見て、ゆかしく覺えければ、牛の行くにつきて僧も入りけり。遙に行きて明き所へ出でぬ。見まはせば、あらぬ世界とおほえて、見も知らぬ花の色いみじきが咲き亂れたり、牛この花を食ひけり。試にこの花を一房取りて食ひたりければ、甘きこと天の甘露もかくあらんと覺えて、めでたかりけるまよに多く食ひたりければ、たゞ肥えに肥え太りけり。心得ず恐しく思ひて、ありつる穴の方へ歸り行くに、初はやすく通りつる穴、身の太くなりて狭くおほえて、やうくとして穴の口までは出でたれども、先出でずして堪へ難き事限なし。前を通る人に、これ助けよと呼はりけれども、耳に聞き入る人もなし、助くる人もなかりけり。人の目にも何と見えけるやらん、不思議なり。日比かさなりて死ぬ。後は石になりて、穴の口に頭をさし出したるやうにてなんありける。立けんじやうせん三藏天竺に渡り給ひたりける日記に、この由しるされたり。

寂照上人鉢を飛ばす事

○今昔十九、巻
河守大江定基出
家語登

三河入道寂照一
大江定基とて文
章の上手なり、
三河守になりて
任國にありしが
妻に早く死なれ
て無常を觀じ入
道して寂照とい
ふ
手長一侍仕

今は昔、三河入道寂照といふ人唐土にわたりて後、唐土の王やんごとなき聖どもを召し集めて、堂を飾りて僧膳をまうけて、經を講じ給ひけるに、王の給はく、今日の齋筵は手長の役あるべからず、各我鉢を飛ばせ遣りて物は受くべしとの給ふ、其心は日本僧を試みんがためなり。さて諸僧、一の座より次第に鉢を飛ばせて物を受く。三河入道末座に著きたり。その番に當りて、鉢を持ちて立たんとす。いかで鉢をやりてこそ受けめとて、人々制し留めけり。寂照申しけるは、鉢を飛ばすことは、別の法を行ひてするわざなり、然るに寂照いまだ此法を傳へ行はず、日本國においてもこの法行ふ人ありけれど、末世には行ふ人なし、いかでか飛ばさんと言ひて居たるに、日本の聖鉢おそしくと責めければ、日本の方に向ひて祈念していはく、我國の三寶神祇助け給へ、恥見せ給ふなと念じ入りて居たる程に、鉢こぼし獨樂のやうにくるめきて、唐土の僧の鉢よりも早く飛びて、物を受けてかへりぬ。その時王よりはじめて、やんごとなき人なりとて、拜みけるとぞ申し傳へたる。

○今廿二十、清
瀧河奥聖人成慢
梅師參照

清瀧川聖の事

今は昔、清瀧川の奥に、柴の庵を作りて行ふ僧ありけり。水ほしき時は水瓶を飛ばして、汲みに遣りて飲みけり。年經にければ、かばかりの行者はあらじと、時々慢心起りけり。かよりけるほどに、我居たる上さまより水瓶來て水を汲む。如何なる物の又かくはするやらんと、そねましく覺えければ、見顯はさんと思ふ程に、例の水瓶飛び來て水を汲みて行く、その時水瓶につきて行きて見るに、水上に五六十町上りて庵見ゆ。行きて見れば三間ばかりなる庵あり、持拂堂別にいみじく造りたり、誠にいみじうたふとし。物きよくすまひたり。庭に橘の木あり、木の下に行道したる跡あり、閼伽棚の下に花がら多く積れり、砌に苔むしたり、神さびたる事かぎりなし。窓の隙よりのぞけば、机に經おほく巻きさしたるなどあり、不斷香の煙滿ちたり。よく見れば、年七八十ばかりなる僧の尊けなる、五銖を握り脇息に押しかよりて眠り居たり。この聖を試みんと思ひて、やは

五銖—金屬にて
送る僧の把る所

の御器なり、又
三銖圓銖といふ
もあり
火界咒—不動尊
の陀羅尼の名
散杖—香水を注
ぐ杖なり、多く
桃の木にてつく
るとぞ

ら寄りて、火界咒を持ちて加持す。火焰俄に起りて庵につく。聖眠りながら散杖を取りて、香水にさしひたして四方にそよぐ。其時庵の火は消えて、我衣に火つきてたど焼けに焼く。下の聖大聲を放ちて惑ふ時に、上の聖目を見あけて、散杖を持ちて下の聖の頭にそそぐ、その時火消えぬ。上の聖のいはく、何の料にかゝる目をば見るぞと問ふ。答へていはく、これは年比河のつらに庵を結びて、行ひ候ふ修行者にて候ふ、この程水瓶の來て水を汲み候ひつる時に、如何なる人のおはしますぞと思ひ候ひて、見顯はし奉らんとて参りたり、ちと試み奉らんとて加持しつるなり、御許し候へ、今日よりは御弟子になりて仕へ侍らんといふに、聖、人は何事いふぞとも思はぬ氣にてありけりとぞ。下の聖、我ばかり尊きものはあらじと、驕慢の心のありければ、佛の惡みて優る聖を設けて、逢はせられけるなりとぞ語り傳へたる。

尊者方便をめぐらして、弟子をたばかりて佛道に入らしめ給ひけり。

不違果とは欲界の煩惱を斷盡して再び欲界に還來せざる證果をいふ

宇治拾遺物語 卷第十四

海雲比丘弟子童の事

海雲比丘一層土の名僧

今は昔、海雲比丘道を行きたまふに、十餘歳ばかりなる童子道に逢ひぬ。比丘童に問ひていはく、何の料の童ぞとの給ふ。童答へていはく、唯道罷る者にて候ふといふ。比丘いふ、汝は法華經は讀みたりやと問へば、童のいはく、法華經と申すらんものこそ、いまだ名をだにも聞き候はねと申す。比丘又いはく、さらば我房に具して行きて法華經教へんとの給へば、童仰せに従ふべしと申して比丘の御供に行く。五臺山の房に行きつきて、法華經を教へ給ふ。經を習ふ程に、小僧常に来て物語を申す。誰人と知らず。比丘の給ふ、常に來る小大徳をば童は知りたりやと、童知らずと申す。比丘のいふ、これこそこの山に住み給ふ文珠よ、我に物語しに來給ふなりと、かやうに教へ給へども、童は文珠と

いふ事も知らず候ふなり、されば何とも思ひ奉らず。比丘童にの給ふ、汝ゆめく女人に近づくことなかれ、あたりを拂ひて馴るゝ事なかれと。童物へ行く程に、葦毛なる馬に乗りたる女人の、いみじく假粧して美しきが道に逢ひぬ。此女のいはく、我この馬の口引きてたべ、道のゆよしくあしくて、落ちぬべく覺ゆるると言ひけれども、童耳にも聞き入れずして行くに、この馬荒立ちて女倒に落ちぬ。怨みていはく、我を助けよ、既に死ぬべく覺ゆるなりと言ひけれども、猶耳に聞き入れず、我師の女人の傍へ寄る事なかれとの給ひしにと思ひて、五臺山へ歸りて、女のありつるやうを比丘に語り申して、されども耳にも聞き入れずして歸りぬと申しければ、いみじくしたり、その女は文珠の化して、汝が心を見給ふにこそあるなれとて譽め給ひけり。さる程に、童は法華經を一部讀み終へにけり。その時比丘のたまはく、汝法華經を讀みはてぬ、今は法師になりて受戒すべしとて、法師になされぬ。受戒をば我授くべからず、東京の禪定寺にいまする倫法師と申す人、此頃公の宣旨を蒙りて受戒を行ひ給ふ人なり、その人の許へ行きて受くべ

きなり、たゞ今は汝を見るまじき事のあるなりとて、泣き給ふ事かぎりなし。童の受戒仕りては、即ち歸り参り候ふべし、如何に思召してかくは仰せ候ふぞと、又いかなればかく泣かせ給ふぞと申せば、唯悲しき事のあるなりとて泣き給ふ。さて童に戒師の許に行きたらんに、何方より來たる人ぞと問はど、清涼山の海雲比丘の許よりと申すべきなりと教へ給ひて、泣くく見送り給ひぬ。童仰せに隨ひて倫法師の許に行きて、受戒すべきよし申しければ、案の如く何方より來たる人ぞと問ひければ、教へ給ひつるやう申しければ、倫法師驚きて、尊き事なりとて禮拜していはく、五臺山には文珠の限住み給ふ所なり、汝沙彌は海雲比丘の善知識に逢ひて、文珠をよく拜み奉りけるにこそありけれとて、尊ぶ事かぎりなし。さて受戒して五臺山へ歸りて、日比居たりつる房の在所を見れば、すべて人の住みたる氣色なし。泣くく一山を尋ねありけれども、遂に在所なし。かれは優婆塞の弟子の僧、賢けれども心弱く女に近づきけり、これはいとけなければ心強くて女人に近づかず、故に文珠これを賢きものなれば、教化して佛道に入らしめ

給ふなり。されば世の人戒をば破るべからず。

寛朝僧正勇力の事

○今廿二十三、
廣瀬寛朝僧正強
力語參照
寛朝一字多法皇
の皇孫敦實親王
の子
中ゆひー衣裳を
掲げて袴の地に
引かぬために腰
のあたりにて中
結ひするなり
あがるくひー
「あななひ」の語
寫なるべし、あ
ななひは足代な
り
なま夕暮ー薄暮

今は昔、遍照寺僧正寛朝といふ人、仁和寺をもしりければ、仁和寺の破れたる所修理せ
さすとて、番匠ども數多集へてつくりけり。日暮れて、番匠どもおのく出でて後に、今
日の造作はいかほどしたるぞ、問はんと思ひて、僧正中のひうちして、高足駄はきてた
だ一人歩み來て、あがるくひども結ひたるもとに立ちまはりて、なま夕暮に見られける
ほどに、黒き装束したる男の烏帽子引き垂れて、顔たしかにも見えすして、僧正の前に
出で來て、つい居て刀を倒に抜きて、引き隠したるやうにもてなして居たりければ、僧
正かれは何者ぞと問ひけり。男片膝をつきて、わび人にはべり、寒さの堪へ難く侍るに、
その奉りたる御衣一つ二つ、下し申さんと思ひ給ふ也といふまゝに、飛びかゝらんと思
ひたる氣色なりければ、異にもあらぬ事にこそあなれ、かく恐しけに威さすとも、唯乞

ちと一つとの
意か

引剝ー追剝

ほうとーボンと

はで、けしからぬ主の心際かなと言ふまゝに、ちよと立ち廻りて、尻をはたと蹴たりけれ
ば、蹴らるゝまゝに、男かきけちて見えすなりにければ、やはら歩み歸りて、坊の許近く
行きて、人やあると高やかに呼びければ、坊より小法師走り來にけり。僧正行きて火燈し
てこよ、こよに我衣剝がんとしつる男の、俄に失せぬるが怪しければ見んと思ふぞ、法師
ばら呼び具して來との給ひければ、小法師走り歸りて、御房引剝に逢はせ給ひたり、御
房たち參り給へと呼ばはりければ、坊々にありとある僧ども、火ともし太刀さけて、七
八人十人と出で來にけり。何處に盜人はさぶらふぞといひければ、こよに居たりつる
盜人の我衣を剝がんとしつれば、剝がれては寒かりぬべく覺えて、尻をほうと蹴たれば
失せぬるなり、火を高く燈して、隠れ居るかと思よとの給ひければ、法師ばらをかしく
も仰せらるゝかなとて、火うち振りつゝ上さまを見る程に、あがるくひの中に落ち挾ま
りてえ働かぬ男あり。彼所にこそ人は見え侍りけれ、番匠にやあらんと思へども、黒き
装束したりといひて昇りて見れば、あがるくひの中に落ち挾まりて、身じろくべきやう

うんじがほ一巻
と顔にて、よわ
りはてたる顔色
をいよ

○今昔二十三
相撰人源恒世會
蛇試力語參照

杖極杖一木の杖
の又をなせる杖

もなく、うんじがほつくりてあり。逆手に抜きたりける刀は、いまだ持ちたり。それを見つけて法師ばら寄りて、刀と鬘と肘とを取りて、引き揚げておろして率て参りたり。具して坊に歸りて、今より後老法師とてなあなづりそ、いと便なき事なりといひて、著たりける衣の中に、綿厚かりけるを脱ぎて、取らせて追ひ出して遣りてけり。

經頼蛇に逢ふ事

昔、經頼といひける相撰の家の傍に、ふる川のありけるが、深き淵なる所ありけるに、夏その川近く木蔭のありければ、帷子ばかり著て中ゆひて、足駄はきて、杖極杖といふものつき、小童一人ともに具してとかくありきけるが、涼まんとて其淵の傍の蔭木に居にけり。淵青く恐しけにて底も見えず、蘆藪などいふもの生ひ茂りたりけるを見て、汀近く立てりけるに、彼方の岸は、六七段ばかりは退きたるらんと見ゆるに、水の漲りて此方さまに來ければ、何のするにかあらんと思ふ程に、此方の汀近くなりて、蛇の頭をさし

外さま一今昔に
「此方様」とある
よるし

片面一今昔に
「固き土」とある
よるし

出でたりければ、此蛇大ならんかし、外さまに昇らんとするにやと、見立てりけるほどに、蛇頭をもたけてつくぐとまもりけり。如何に思ふにかあらんと思ひて、汀一尺ばかり退きて、端近く立ちて見ければ、暫時ばかりまもりく、頭を引き入れてけり。さて彼方の岸さまに水漲ると見ける程に、又此方さまに水浪立ちて後、蛇の尾を汀よりさし上げて、我立てる方さまにさし寄せければ、この蛇思ふやうのあるにこそとて、任せて見立てりければ、猶さし寄せて、經頼が足を三四返ばかり纏ひけり。如何にせんずるにかあらんと思ひて立てるほどに、纏ひえてきしくと引きければ、川に引き入れんとするにこそありけれと、その折に知りて、踏み強りて立てりければ、いみじう強く引くと思ふ程に、はきたる足駄の齒を踏み折りつ。引き倒されぬべきを、構へて踏み直りて立てれば、強く引くとも愚なり。引き取られぬべく覺ゆるを、足を強く踏み立てければ、片面に五六寸ばかり足を踏み入れて立てりけり。よく引くなりと思ふ程に、繩などの切るよやうに、切るとまよに、水中に血のさつと沸き出づるやうに見えければ、切れぬる



なりけりとて足を引きければ、蛇引きさして上りけり。その時足に纏ひたる尾を引きほ
 どきて、足を水に洗ひけれども、蛇の跡失せざりければ、酒にてぞ洗ふと人の言ひけれ
 ば、酒とりに遣りて洗ひなどして、後に従者ども呼びて、尾の方を引きあけさせたりけ
 れば、大きなりなどもおろかなり。切口の大き徑一尺ばかりあるらんとぞ見えける。頭
 の方のきれを見せに遣りたりければ、彼方の岸に大なる木の根のありけるに、頭の方を
 數多かへり纏ひて、尾をさし起して足を纏ひて引くなりけり。力の劣りて中より切れに
 けるなめり、我身の切るよをも知らず引きけん、あさましき事なりかし。その後蛇の力
 のほど、幾人ばかりの力にありしと試みんとて、大なる繩を蛇の巻きたる所につけて、
 八十人ばかりして引かせてけれども、猶足らずといひて、六十人ばかりかゝりて引
 きける時にぞ、かばかりぞおほえしと言ひける。それをおもふに、經頼が力は、さは百
 人ばかりが力を持たるにやと覺ゆるなり。

魚養の事

今は昔、遣唐使の唐土にある間に、妻を設けて子をうませつ、その子いまだ幼きほどに日本にかへる。妻に契りていはく、他遣唐使往かんにつけて消息遣るべし、又この子乳母離れん程には迎へ取るべしと、契りて歸朝しぬ。母遣唐使の來るごとに、消息やあると尋ぬれど、あへて音もなし。母大きに恨みて、此兒を抱きて日本へ向きて、兒の頸に遣唐使それがしが子といふ簡を書きて、結ひつけて、宿世あらば親子の中は行き逢ひなるといひて、海に投げ入れて歸りぬ。父或時難波の浦の邊を行くに、沖の方に鳥の浮びたるやうにて白き物見ゆ。海近くなるまよに、見れば童に見なしつ。怪しければ馬を控へて見れば、いと近く寄りくるに、四つばかりなる兒の白くをかしけなる、浪につきて寄り來たり。馬をうち寄せて見れば、大なる魚の背に乗り。従者をもちて抱き取らせ、て見ければ頸に簡あり、遣唐使某が子と書けり。さは我子にこそありけれ、唐土にて言

七大寺一東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、藥師寺、西大寺、法隆寺

○今昔十六、新羅后家國王得長谷觀音助語參照

ひ契りし兒を問はずとて、母が腹立ちて海に投げ入れてけるが、しかるべき縁ありて、かく魚に乗りて來たるなめりと、あはれに覺えて、いみじう悲しくて養ふ。遣唐使のいきけるにつけて、このよしを書き遣りたりければ、母も今ははかなきものに思ひけるに、かくと聞きてなん希有の事なりと喜びける。さてこの子大人になるまよに、手をめでたく書きけり。魚に助けられたりければ、名をば魚養とぞつけたりける。七大寺の額どもは、これが書きたるなりけりと。

新羅國の后金の榻の事

これも今は昔、新羅國に后おはしけり。その後忍びて密男を設けてけり。王このよしを聞き給ひて、后を捕へて、髮に繩をつけて上へつりつけて、足を二三尺ばかり引きあげて置きたりければ、すべきやうもなく、心の中に思ひ給ひけるやう、かゝる悲しき目を見れども助くる人なし、傳へて聞けば、この國より東に日本といふ國あり、その

國に長谷の觀音と申す佛現じ給ふなり、菩薩の御慈悲この國まで聞えてはかりなし、願をかけ奉らば、などかは助け給はざらんとて、目をふさぎて念じ入りたまふ程に、金の榻足の下に出で來ぬ。それをふまへて立てるに、すべてくるしみなし。人の見るにはこの榻見えす、日比ありて免され給ひぬ。後に后持ち給へる寶どもを、多く使を差して長谷寺に奉り給ふ。その中に大なる鈴、鏡、かねの籠今にありとぞ。かの觀音念じ奉れば、他國の人も驗を蒙らすといふことなしとなん。

珠の價量りなき事

これも今は昔、筑紫に大夫さだしけと申す者ありけり。此頃ある箱崎の大夫のりしけが祖父なり。そのさだしけ京のほりしけるに、故宇治殿に參らせ、又私の知りたる人々にも心ざさんとて、唐人に物を六七千疋が程借るとて、太刀を十腰、ぞ實におきける。さて京に上りて宇治殿に參らせ、思ひのまよに私の人々に遣りなどして歸り下りけるに、淀

○今昔二十六、
關西貞重從者於
淀買得玉語

故宇治殿一宇治
關白類通

あこやの珠一圓
珠

惑ひ取りて一あ
わてて取りて

にて船に乗りける程に、人變應したりければ、これを喰ひなどして居たりける程に、端艇にて商するものども寄りきて、そのものや買ふ、かのものや買ふなどたづね問ひける中に、珠をや買ふといひけるを、聞き入ると人もなし。さだしけが舍人に仕へける男船の舳に立てりけるが、こよへ持ておはせ、見んといひければ、袴の腰よりあこやの珠の大なる豆ばかりありけるを、取り出して取らせたりければ、著たりける水干をぬぎて、これに代へてんやと言ひければ、珠の主の男所得したりと思ひけるにや、惑ひ取りて船さし放ちていければ、舍人も高く買ひたるにやと思ひけれども、惑ひいにければ、悔しと思ふく、袴の腰に包みて、こと水干著換へてぞありける。かよる程に日數つもりて、博多といふ所に行き著きにけり。さだしけ船より下るとまよに、物貸したりし唐人の許に、質はすくなかりしぞ、物は多くありしなど言はんとて行きたりければ、唐人も待ち喜びて、酒飲ませなどして物語しける程に、この珠持の男、下種唐人に逢ひて、珠や買ふといひて、袴の腰より珠を取り出でて取らせければ、唐人珠を受け取りて、手の上に置

たへまづーまづ
返し給へ

きてうち振りて見るまよに、あさましと思ひたる顔氣色にて、これはいくらほどと問ひければ、ほしと思ひたる顔氣色を見て、十貫といひければ、感ひて十貫に買はんといひけり。實は二十貫といひければ、それをも感ひ買はんといひけり。さては價高きものにやあらんと思ひて、たべ、まづと乞ひけるを、惜みけれどもいたく乞ひければ、我にもあらで取らせたりければ、今よく定めて賣らんとて、袴の腰に包みて退きにければ、唐人すべきやうもなくて、さだしけと向ひたる船頭がもとに来て、その事ともなくさへづりければ、この船頭うちうなづきてさだしけに言ふやう、御從者の中に珠持ちたる者あり、その珠取りて賜はらんといひければ、さだしけ人を呼びて、この供なる者の中に珠持ちたる者やある、それ尋ねて呼べといひければ、このさへづる唐人走り出でて、やがてその男の袖をひかへて、くはこれぞくとて引き出でたりければ、さだしけ誠に珠や持ちたると問ひければ、濫々にさぶらふ由をいひければ、いでくれよと乞はれて、袴の腰より取り出でたりけるを、さだしけ郎等して取らせけり。それを取りて、向ひ居た

たうしー總師か

る唐人手に入れ受け取りて、うち振りて見て立ち走り内に入りぬ。何事にかあらんと見る程に、さだしけが七十貫が質に置きし太刀どもを、十ながら取らせたりければ、さだしけは呆れたるやうにてぞありける。古水干一つに換へたるものを、若干のものに換へて止みにけん、實にあきれぬべき事ぞかし。珠の價は限なきものといふ事は、今始めた事にはあらず。筑紫にたうしせうすといふ者あり、それが語りけるは、物へ行きける道に、男の珠や買ふといひて、反古の端に包みたる珠を、懐より引き出でて取らせたりけるを見れば、木樂子よりも小き珠にてぞありける。これはいくらと問ひければ、絹二十疋といひければ、あさましと思ひて物へいきけるを止めて、珠持の男具して家に歸りて、絹のありけるまよに、六十疋ぞ取らせたりける。これは二十疋のみはすまじきものを、少くいふがいとほしさに、六十疋を取らするなりと言ひければ、男喜びていにけり。その珠を持ちて唐に渡りてけるに、道の程恐しかりけれども、身をも放たず守などのやうに頸にかけてぞありける。悪しき風の吹きければ、唐人は荒き浪風に逢ひぬれば、

ひら—藤平

船の内に一の寶と思ふものを海に入るなるに、このせうすが珠を海に入れんといひければ、せうすが言ひけるやうは、この珠を海に入れては、生きてもかひあるまじ、唯我身ながら入れれば入れよとて抱へて居たり。さすがに人を入れるべきやうも無かりければ、とかく言ひける程に、珠失ふまじき報やありけん、風なほりにければ、喜びて入れずなりにけり。其船の一の船頭といふ者も、大なる珠持ちたりけれども、そは少しひらにて、この珠には劣りてぞありける。かくて唐に行きつきて、珠買はんと言ひける人の許に、船頭が珠をこのせうすが持せて遣りける程に、道に落してけり。あきれ騒ぎて歸り覓めけれども、何所にかあらんずと思ひ詫びて、我珠を具して、そこの珠落しつればすべき方なし、それが代にこれを見よとて取らせたれば、我珠はこれには劣りたりつるなり、其珠の代に此珠を得たらば、罪深かりなんとて返しけるぞ、さすがにこゝの人には違ひたりける、この國の人ならば取らざらんやは。かくてこの失ひつる珠の事を歎く程に、遊女の許に往にけり。二人物語しけるついでに、胸を探りて、など胸は騒ぐぞと問ひければ、し

こゝの人—日本の人

時かはさず—時を移さずなり
かくれの方—正門の方にはあらず
忍びて入るべき所をいふ

美濃—美濃産の銅にて美濃八丈といふ

かじかの人の珠を落して、それが大事なることを思へば、胸騒ぐぞといひければ、道理なりとぞいひける。さて歸りて後二日ばかりありて、この遊女の許より、さしたる事なん言はんと思ふ、今のほど時かはさず來と言ひければ、何事かあらんとて急ぎ行きたりけるを、例の入る方よりは入らずして、かくれの方より呼び入れければ、如何なる事にかあらんと思ふく入りたりければ、これは若しそれに落したりけん珠かとて、取り出でたるを見れば、違はずその珠なり。こはいかにとあさましくて問へば、こゝに珠賣らんとて過ぎつるを、さる事いひしぞかと思ひて、呼び入れて見るに、珠の大なりつれば、もしさもやと思ひて、言ひ留めて呼びに遣りつるなりといふに、事もおろかなり、何處ぞその珠持ちたりつらんものはいへば、彼處に居たりといふを呼びに遣りて、珠の主の許に牽て行きて、これは云々して、その程に落したりし珠なりといへば、えあらがはで、その程に見つけたる珠なりけりとぞ言ひける。聊なる物取らせてぞ遣りける。さてその珠を返して後、唐綾ひとつをば、唐には美濃五正が程にぞ用ふるなる、せうすが珠をば

唐綾五千段にぞ代へたりける。その價のほどを思ふに、こよにては絹六十疋に代へたる珠を、五萬貫に賣りたるにこそあなれ。それを思へば、さだしけが七十貫が質を返したりけんも、驚くべくもなき事にてありけりと、人のかたりしなり。

北面女雜使六の事

これも今は昔、白河院の御時北面の曹司にうるせき女ありけり、名をば六とぞいひける。殿上人どももてなし興じけるに、雨うちそほふりて徒然なりける日、或人六よびて徒然慰めんとして、使を遣りて六呼びて來と言ひければ、程もなく六召して参りて候ふといひければ、彼方より内の出居の方へ具して來と言ひければ、侍出で來て、此方へ参り給へといへば、便なく候ふなどいへば、侍歸り來て召し候へば便なく候ふと申して、おそれ申し候ふなりといへば、つきみて言ふにこそと思ひて、などかくはいふぞ、唯來といへども僻事にてこそ候ふらめ、先々も内の御出居などへ参る事も候はぬにといひければ、

うるせき一美しき

つきみて一強ちに辭する意なり、昔聞集に、太政大臣の家にも

もなくといふ職のありけるを家陸卿所望せられたるを大臣しはしつきみ給ひければ詠みて遣しけることあり刑部の録一刑省の屬官なり女の六とこの録とを聞き違へたるなり
廳官一檢非違使の役人をいふ、刑部録にて檢非違使の廳に勤仕せるものなるべし

七宮一鳥羽院の皇子覺快法親王上童一殿上の給仕の童子

この多く居たる人々、唯参り給へ、やうぞあるらんと責めければ、筋なきおそれに候へども、召しにて候へばとて参る。この主人見やりたれば、刑部の録といふ廳官、鬢鬚に白髪交りたるが、木賊の狩衣に青袴著たるが、いと事麗しくさやくとなりて、扇を笏に取りて、少しうつぶして蹲り居たり。大方いかにいふべしとも覺えず、物もいはれねば、この廳官いよく、恐れ畏まりてうつぶしたり。主人さてあるべきならねば、やと廳にはまた何者か候ふといへば、それがしかれがしと言ふ、いとけにくしくもおほえずして、廳官うしろざまへすべり行く。この主人、かう宮づかへするこそ神妙なれ、見参には必ず入れんすぞ、疾う罷りねとこそやりけれ、この六後に聞きて笑ひけるとか。

仲胤僧都連歌の事

これも今は昔、青蓮院の座主の許へ、七宮渡らせ給ひたりければ、御徒然慰め参らせんと、若き僧綱有職など庚申して遊びけるに、上童のいとにくさけなるが、瓶子取りなどし

大童子一僧綱な
どに隨從するも
のなり、中童子
といふもあり

わたう一我黨に
て、故等の意

大將星一星宿の
名
小野宮一藤原實
賴

ありきけるを、或僧忍びやかに、うへわらは大童子にも劣りたり、と連歌れんがにしたりけるを、人々暫時案ずる程に、仲胤僧都その座にありけるが、やゝ胤早うつけたたりと言ひければ、若き僧たち、如何にと顔をまもりあひ侍りけるに、仲胤、祇園ぎんの御會ごえを待つばかりなり、とつけたりけり。これをおのゝ、この連歌はいかにつけたるぞと、忍びやかに言ひ合ひけるを、仲胤聞きて、やゝわたう、連歌だにつかぬとつけたるぞかと言ひたりければ、これを聞き傳へたる者ども、一度にはつとよみ笑ひけりとか。

大將つゝしみの事

これも今は昔、月の大將星を犯すといふ勘文を奉れり。よりて近衛大將重く愼み給ふべしとて、小野宮右大將は様々の御祈ごいのりどもありて、春日社、山階寺などにも御祈數多おまたせらる。その時の左大將は、批把左大將仲平と申す人にてぞおはしける。東大寺の法藏僧都はこの左大將の御祈の師なり。定めて御祈の事ありなんと待つに、音もし給はねば、

覺束なさに京に上りて批把殿に参りぬ。殿逢ひ給ひて、何事にて上られたるぞとの給へば、僧都申しけるやう、奈良にてうけ給はれば、左右大將愼み給ふべしと、天文博士勘へ申したりとて、右大將殿は春日社山階寺などに、御祈さまぐに候へば、殿よりも定めて候ひなんと思ひ給へて、案内つかう奉るに、さる事も承らずと皆々申し候へば、覺束なく思ひ給ひて参り候ひつるなり、猶御祈候はんこそよく候はめと申しければ、左大將の給ふやう、尤も然るべきことなり、されどおのが思ふやうは、大將の愼むべしとまうすなるに、おのれもつよしまば、右大將のために悪しうもこそあれ、かの大將は才も賢くいますかり、年もわかし、長く朝家あさけに仕うまつるべき人なり、おのれにおきては、させらる事もなし、年も老いたり、如何にもなれ、なでふ事かあらんと思へば、祈らぬなりとの給ひければ、僧都ほろゝとうち泣きて、百千の御祈にまさるらん、この御心の定にては、事のおそり更に候はじと言ひてまかでぬ。されば實に事なくて大臣になりて、七十餘までなんおはしける。

○この話古事談
六東宮隱軍鳥獸
部及び十訓抄に
いづ
御堂關白殿一赫
原道長

なでふーなでふ
恐るゝことあり
ん

晴明一阿伴晴明

御堂關白の御犬晴明等きどくの事

今は昔、御堂關白殿、法成寺を建立し給ひて後は、日毎に御堂へ参らせ給ひけるに、白
き犬を愛してなん飼はせ給ひければ、いつも御身を離れず御供しけり。ある日例の如く
御供しけるが、門を入らんとし給へば、此犬御さきに塞がるやうに吠えまはりて、内へ
入れ奉らじとしければ、なでふとて、車より下りて入らんとし給へば、御衣の裾をくひ
て引き留め申さんとしければ、いかさまやうある事なるらんとて、榻を召し寄せて御尻
をかけて、晴明にきと参れと、召しに遣したりければ、晴明即ち参りたり。かゝる事のあ
るはいかゞと尋ね給ひければ、晴明暫し占ひて申しけるは、これは君を呪詛し奉りて候
ふものを道にうづみて候ふ、御越しあらましかば悪しく候ふべき、犬は通力のものにて
告げ申して候ふなりと申せば、さてそれは何所にか埋みたる、あらはせとの給へば、易
く候ふと申して、暫し占ひて、此所にて候ふと申す所を掘らせて見給ふに、土五尺ばか



道摩法師一俗に
い上置屋道満を
り

諸折戸二枚あ
りて左右に開く
戸なり、片折戸
に對していよ

顯光公一關白兼
通の子なり、道
長のためには從
兄弟たり、兼通
兼家も兄弟中惡
しかりしなり

り掘りたりければ、案の如くものありけり。土器を二つうち合せて、黄なる紙捻にて十文字にからけたり。開いて見れば中には物もなし、朱砂にて一文字を土器の底に書きたるばかりなり。晴明が外には知りたる者候はず、若し道摩法師や仕りたるらん、糺して見候はんとて、懐より紙を取り出し、鳥の姿に引き結びて、呪を誦じかけて空へ投げ上けたれば、忽に白鷺になりて、南を指して飛び行きけり。この鳥の落ちつかん所を見て參れとて、下部を走らするに、六條坊門萬里小路邊に、ふりたる家の諸折戸の中へ落ち入りにけり、即ち家主老法師にてありける、搦め取りて參りたり。呪詛の故を問はるゝに、堀河左大臣顯光公のかたらひを得て、仕りたりとぞ申しける。この上は流罪すべけれど、道摩が咎にはあらずとて、向後かよるわざすべからずとて、本國播磨へ追ひ下されにけり。この顯光公は死後に怨靈となりて、御堂殿邊へは祟をなされけり。惡靈左府と名づく云々。犬はいよく不便にせさせ給ひけるとなん。

○今昔二十四、
俊平入道算術
術語参照

言よく言ひけれ
ば一詞巧にいひ
ければ

高階俊平が弟入道算術の事

これも今は昔、丹後前司高階俊平といふ者ありけり、後には法師になりて、丹後入道とてぞありける。それが弟にて、官もなくある者ありけり。それが主の許に下りて筑紫にありけるほどに、新しく渡りたりける唐人の算いみじくおくありけり。それに逢ひて、算おく事習はんといひけれども、初めは心にも入れて教へざりけるを、少し置せて見て、いみじく算おきつべかりけり、日本にありては何にかはせん、日本は算おく道、いとしもかしこからぬ所なり、我に具して唐に渡らんといはど、教へんといひければ、よくだに教へてその道に賢くだにもなりなば、言はんにこそ随はめ、唐に渡りても用ひられてだにありぬべくは、言はんに隨ひて唐にも具せられて往かんなど、言よく言ひければ、それになん引かれて心に入れて教へける。教ふるに隨ひて、一事を聞きては十事も知るやうになりければ、唐人もいみじくめでて、我國に算おくものは多かれど、汝ばかりこ

まほに十分記

の道に心得たる者はなきなり、必ず我に具して唐へ渡れといひければ、更なり、言はんに隨はんといひるけり。此算の道には病する人をおきやむる術もあり、又病せねども、にくしねたしと思ふものを、立所におき殺す術などあるも、更に惜みかくさじ、ねんごろに傳へんとす、慥に我に具せんといふ誓言立てよと言ひければ、まほには立てず、少しは立てなどしければ、猶人殺す術をば、唐へ渡らん船の中にて傳へんとて、他事どもをば能く教へたりけれども、その一事をば控へて教へざりけり。かよる程に能く習ひ傳へてけり。それに俄に主の事ありて上りければ、その供に上りけるを、唐人聞きて留めけれども、いかで年頃の君のかよる事ありて俄にのほり給はん、送りせではあらん、思ひ知り給へ、約束をば違ふまじきぞなすかしければ、實にと唐人思ひて、さは必ず歸りてこよ、今日明日にても唐へ歸らんと思ふに、君の來らんを待ちつけて渡らんといひければ、その契を深くして京に上りにけり。世の中のすさまじきまよには、やをら唐にや渡りなましと思ひけれども、京に上りにければ、親しき人々に言ひ留められて、俊平

ほうけてーほけ
ての音便口手ッワー口不
調法

入道など聞きて制し留めければ、筑紫へだにえ往かずなりにけり。この唐人はしばし待ちけるに、音もせざりければ、わざと使おこせて、文を書きて怨みおこせけれども、年老いたる親のあるが、今日明日とも知らねば、それがならんやう、見はてて往かんと思ふなりと言ひやりて、往かずなりければ、暫しこそ待ちけれども、謀りけるなりけりと思へば、唐人は唐に歸り渡りて、よく呪ひて行きにけり。初めはいみじく賢かりける者の、唐人に呪はれて後にはいみじくほうけて、物も覺えぬやうにてありければ、しわびて法師になりてけり。入道の君とてほうけくとして、させる事なきものにて、俊平入道が許と山寺などに通ひてぞありける。或時、若き女房どもの集りて庚申しける夜、この入道の君、片隅にほうけたる體にて居たりけるを、夜更けるまよにねぶたがりて、中に若く誇りたる女房のいひけるやう、入道の君こそ、かよる人はをかしき物語などもするぞかし、人々笑ひぬべからん物語し給へ、笑ひて目覺さんといひければ、入道おのれは口手づつにて、人の笑ひ給ふばかりの物語はえ知り侍らじ、さはありとも笑はんとだにあ

いづら〜とい
かに〜といよ
に同じ

らば、わらはかし奉りてんかしと言ひければ、物語はせじ、唯笑はかさんとあるは、猿樂をし給ふか、それは物語よりは優る事にてこそあらめと、まだしきに笑ひければ、さも侍らず、只笑はかし奉らんと思ふなりと言ひければ、こは何事ぞ、疾く笑はかし給へ、いづら〜と責められて、何にかあらん、物持ちて火の明き所へ出で來りて、何事せんずるぞと見れば、算の袋をひき解きて、算をさら〜と出しければ、これを見て女房ども、これをかしき事にてあるかく、いざ〜笑はんなど嘲るを、いらへもせて算をさらさらと置き居たりけり。置きはてて、廣さ七八分ばかりの算のありけるを、一つとり出でて、手に捧けて、御前等ごぜんたちさはいたく笑ひ給ひて侘び給ふなよ、いざわらはかし奉らんといひければ、その算捧げ給へるこそをこがましくてをかしけれ、何事にて侘ぶばかりは笑はんぞ、など言ひ合ひたりけるに、その八分ばかりの算をおき加ふると見れば、ある人みなながら、すどろにゑつほに入りけり。痛く笑ひて止とどまらんとすれどもかなはず、腹の腸わた切ると心地して、死ぬべく覺えければ涙をこほし、すべきかたなくて、ゑ

つほに入りたる者ども物をだにえいはで、入道に向ひて手を摺りければ、さればこそ申しつれ、笑ひ飽き給ひぬやと言ひければ、うなづきさわぎて、伏しかへり笑ふ〜手を摺りければ、能く侘びしめて後に、置きたる算をさら〜と押し毀ちたりければ、笑ひさめにけり。今暫しあらましかば死なまし、又かばかり堪へ難き事こそ無かりつれとぞ言ひあひける。笑ひ困こまじて、集りふして病むやうにぞしける。かよれば、人をおき殺しおき生くる術ありといひけるをも、傳へたらましかば、いみじからましとぞ人もいひける。算の道は恐しき事にてぞありけるとなん。

宇治拾遺物語 卷第十五

清見原天皇大友皇子と合戦の事

大友皇子一弘文
天皇
清見原の天皇一
天武天皇
おそり一恐れに
同じ

今は昔、天智天皇の御子に、大友皇子といふ人ありけり、太政大臣になりて、世の政事を行ひてなんありける。心の中に、帝うせたまひなば、次の帝には我ならんと思ひ給ひけり。清見原の天皇、その時は春宮にておはしましけるが、この氣色を知らせ給ひければ、大友皇子は時の政事をし、世のおほえも威勢も猛なり、我は春宮にてあれば勢も及ぶべからず、あやまたれなんとおそり思ひて、帝病つき給ふ、すなはち吉野山の奥に入りて、法師になりぬと言ひて籠り給ひぬ。その時大友皇子に人申しけるは、春宮を吉野山に籠めつるは、虎に羽をつけて野に放つものなり、同じ宮に据ゑてこそ心のまゝにせめと申しければ、實にもと思ひて、軍を整へて迎へ奉るやうにして、殺し奉らんと

春宮の御女一十
市皇女
田原一藤原郡に
あり
そへ一山のナモ
族に一族をこの
術か

計り給ふ。この大友皇子の妻にては、春宮の御女ましくければ、父の殺され給はん事を悲み給ひて、いかでこの事告げ申さんと思しけれど、すべきやうなかりけるに、思ひ侘び給ひて、鮎の包裹焼のありける腹に、ちひさく文を書きて、押し入れて奉り給へり。春宮これを御覽じて、さらでだに恐れ思しける事なれば、さればこそとて、急ぎ下種の狩衣袴を著給ひて、藁沓をはきて、宮の人にも知られず、唯一人山を越えて、北まにおはしける程に、山城國田原といふ所へ、道も知り給はねば、五六日にぞたどるたどるおはしつきにける。その里人怪しくけはひの氣高く覺えければ、高坏に粟を焼き又ゆでなどして参らせたり。その二色の粟を、思ふ事叶ふべくは生ひ出でて木になれとて、片山のそへに埋み給ひぬ。里人これを見て、怪しがりて印をさして置きつ。其所を出で給ひて、志摩國さまへ山に添ひて出で給ひぬ。その國の人、怪しがりて問ひ奉れば、道に迷ひたる人なり、喉乾きたり水飲ませよと仰せられければ、大なる釣瓶に水を酌みて参らせたりければ、喜びて仰せられけるは、汝が族にこの國の守とはなさんとて、美濃

國へおはしぬ。此國の洲股の渡に舟もなくて立ち給ひたりけるに、女の大なる舟に布入れて洗ひけるに、この渡何ともして渡してんやとの給ひければ、女申しけるは、一昨日大友の大臣の御使といふ者來たりて、渡の舟ども皆取り隠させていにかば、これを渡し奉りたりとも、多くの渡え過ぎさせ給ふまじ、かく謀りぬる事なれば、今軍攻め來らんずらん、いかどして遁れ給ふべきといふ。さてはいかどすべきとの給ひければ、女申しけるは、見奉るやうたどにはいませぬ人にこそ、さらば隠し奉らんといひて、湯槽をつぶしになして、その下に伏せ奉りて、上に布を多く置きて、水酌みかけて洗ひ居たり。暫時ばかりありて、兵四五百人ばかり來たり。女に問うていはく、これより人や渡りつるといへば、女のいふやう、やごとなき人の、軍千人ばかり具しておはしつる、今は信濃國には入り給ひぬらん、いみじき龍のやうなる馬に乗りて、飛ぶが如くしておはしき、この少勢にては、追ひつき給ひたりとも皆殺され給ひなん、これよりかへりて、軍を多く整へてこそ追ひ給はめといひければ、誠に思ひて、大友皇子の兵皆引き返しにけり。



その後女に仰せられけるは、この邊に軍催さんに出で來なんやと、問ひ給ひければ、女走り惑ひて、その國のむねとある者どもを催し語らふに、即ち二三千人ばかり兵出で來にけり。それを引き具して大友皇子を追ひつけ給ふに、近江の國大津といふ所に追ひつきて戦ふに、皇子の軍敗れて散々に逃げける程に、大友皇子遂に山崎にて討たれ給ひて頭を取られぬ。それより春宮、大和國に歸りおはしてなん位に即き給ひける。田原に埋み給ひし燒栗ゆで栗は、形も變らず生ひ出でけり。今に田原の御栗とて奉るなり。志摩の國にて水めさせたる者は高階氏の者なり、さればそれが子孫國守にてはあるなり。その水めしたりし釣瓶は、今に藥師寺にあり。洲股の女は、不破の明神にてましくけりとなん。

頼時が胡人見たる事

今は昔、胡國といふは唐よりも遙に北と聞くを、奥州の地に續きたるにやあらんとて、

○今昔二十一、陸奥國安徳頼時、行胡國歸來語參照

はるくべき一室を明にするをいふ

厨川の次郎—安徳頼時、鳥海の三郎—宗任

宗任法師とて筑紫にありしが、語り侍りけるなり。この宗任が父は頼時とて、陸奥國の蝦夷にて、朝家に順ひ奉らすとて、攻めんとせられける程に、往昔より今に至るまで朝家に勝ち奉る者なし、我は過たすと思へども、責をのみかうぶれば、はるくべき方なきを、奥地より北に見わたさるゝ地あなり、其所に渡りて有様を見て、さてもありぬべき所ならば、我に順ふ人のかぎりを、皆牽て渡して住まんといひて、まづ船一つを調べて、それに乗りに行きたりける人々は、頼時、厨川の次郎、鳥海の三郎、さては又むつまじき郎等ども二十人ばかり、食物酒など多く入れて船を出してければ、幾許も走らぬほどに見渡しなりければ、渡り著きにけり、左右は遙なる葦原ぞありける。大なる川の湊を見つけて、その湊にさし入りにけり。人や見ゆると見けれども人けもなし。陸にのほりぬべき所やあると見けれども、葦原にて道踏みたる方もなかりければ、若し人けする所やあると、川をのほりざまに七日まで上りにけり。それが唯同じやうなりければ、あさましきわざかなとて、猶二十日ばかり上りけれども、人のけはひもせざりけり。三十日ばかり

上りけるに、地の響くやうにしければ、如何なる事のあるにかと恐しくて、葦原にさし隠れて、響くやうにする方を覗きて見ければ、胡人として繪に書きたる姿したる者の、赤きものにて頭結ひたるが、馬に乗りつれてうち出でたり。これは如何なる者ぞと見る程に、うち續き數知らず出で來にけり。河原の端はたに集り立ちて、聞きも知らぬ事をさへづりあひて、河にはらくとうち入りて渡りける程に、千騎ばかりやあらんとぞ見えわたる。これが足音の響にて遙に聞えけるなりけり。かちのものをば、馬に乗りたる者の側に引きつけ引きつけて渡りけるをば、唯徒かちひたり渡する所なめりと見けり。十日ばかり上りつるに、一所も瀬なかりし川なれば、かれこそ渡る瀬なりけれと見て、人過ぎて後にさし寄せて見れば、同じやうに底ひも知らぬ淵にてなんありける。馬うま筏いかだを作りて泳がせけるに、徒人かちひはそれに取りつきて渡りけるなるべし。猶上るともはかりもなく覺えければ、恐しくてそれより歸りにけり。さて幾許いくばくもなくぞ頼時は亡せにける。されば胡國と日本日本の東の奥の地とは、さし違ひてぞあなると申しける。

馬筏一馬を幾匹も繋ぎ合せて我の如くする也

○古事談大卷

法性寺殿一藤原忠通

賀茂祭のかへり武正兼行御覽の事

これも今は昔、賀茂祭の供に下野武正、秦兼行つかはしたりけり。そのかへさ、法性寺殿紫野にて御覽じけるに、武正兼行、殿下御覽すと知りて、殊にひきつくるひて渡りけり。武正殊に氣色してわたる、次に兼行又わたる、各とりぐくに言ひ知らず。殿御覽じて、今一度北へ渡れと仰せありければ、又北へ渡りぬ。さてあるべきならねば又南へ歸り渡るに、この度は兼行先に南へ渡りぬ。次に武正渡らんすらんと人々待つほどに、武正やや久しく見えず。こはいかと思ふ程に、向ひに引きたる幔まより東を渡るなりけり。いかにかいと待ちけるに、幔の上より冠の巾子こしばかり見えて、南へわたりたりけるを、人々猶すぢなきものの心ぎはなりとなん譽めけりとか。

巾子一冠の頂の上の高き所をいふ
すぢなき一いはんすべなく面白き

まよき一眞巻可
とて可の名なり

下桁一今いふね
だ

賭弓一正月十八
日左右衛府の弓
の勝負あるをい
ふ

門部府生海賊射かへす事

これも今は昔、門部の府生といふ舍人ありけり。若く身は貧しくてぞありけるに、まよきを好みて射けり。夜も射ければ、僅なる家の葺板を抜きて燈して射けり。妻も此事をうけず、近邊の人も、あはれよしなき事し給ふものかなといへども、我家もなくて射んは、誰も何か苦しかるべきとて、猶葺板を燈して射る、これを誇らぬ者一人もなし。かくする程に、葺板皆失せぬ。終には椽、椽を割り焼きつ。又後には棟梁焼きつ。後には桁柱皆割り焼きつ。これあさましき物のさまかなと言ひあひたるほどに、板敷下桁までも皆割り焼きて、隣の人の家に宿りたりけるを、家主この人の様體を見るに、この家も毀ち焼きなんぞと思ひていとへども、さのみこそあれ、待ち給へなど言ひて過ぐる程に、能く射るよし聞えありて、召し出されて賭弓仕うまつるに、めでたく射ければ叡感ありて、終には相撲の使に下りぬ。能き相撲ども多く催し出でぬ。又數知らず物儲けて上り

かばね島一備前
にあり

いりめき一騒ぎ
氣色だつ

屋形一船樓

黄水一反吐
可立一弓をもて
身構してその場
所に立つをいふ

けるに、かばね島といふ所は海賊の集まる所なり。過ぎ行く程に具したる者のいふやう、あれ御覽候へ、あの船どもは海賊の船どもにこそ候ふめれ、こはいかどせさせ給ふべきといへば、この門部の府生いふやう、男なさわぎぞ、千萬人の海賊のありとも今見よといひて、皮子より賭弓の時著たりける装束取り出でて、麗しくしやうぞきて、冠老懸などあるべき定にしければ、従者ども、こは物にくるはせ給ふか、叶はぬまでもたてつきなどし給へかしといりめきあひたり。麗しく取りつけて、肩脱ぎて馬手後見まはして、屋形の上に立ちて、今は四十六歩に寄り來にたるかといへば、従者ども大方とかく申すに及ばずとて、黄水をつきあひたり。いかにかく寄り來にたるかといへば、四十六歩に近づき候ひぬらんといふ時に、上屋形へ出でて、あるべきやうに弓立して、弓をさしかさして、暫しありてうちあけたれば、海賊がむねとの者、黒はみたる物著て、赤き扇を開きつかひて、疾く漕ぎ寄せて、乗り移りて移し取れといへども、この府生騒がずして、引き堅めてとろくと放ちて、弓たふして見やれば、この矢目にも見えすして

いたつき一鎌の
平かなる稽古矢

宗との海賊が居たる所へ入りぬ。早く左の目にいたつき立ちにけり。海賊やといひて、扇を投げすててのけざまに倒れぬ。矢を抜きて見るに、うるはしく戦などする時のやうにもあらず、塵ばかりの物なり。これをこの海賊ども見て、やよこれはうちある矢にもあらずりけり、神箭なりけりといひて、疾くく各漕ぎ戻りねとて逃けにけり。その時門部の府生うすわらひて、某等が前にはあぶなく立つ奴原かなといひて、袖うちおろして小唾吐きて居たりけり。海賊騒ぎ逃げける程に、袋ひとつなど少々物ども落したりける、海に浮びたりければ、この府生取りて笑ひて居たりけるとか。

○此話十訓抄にも出づ

後徳大寺左大臣
一藤原實定
大内一仁和寺の
事なるべし

土佐の判官代通清人たがひして關白殿に逢ひ奉る事

これも今は昔、土佐判官代通清といふ者ありけり。歌を詠み源氏狭衣などをうかべ、花の下月の前とすきありきけり。かゝる好物なれば、後徳大寺左大臣、大内の花見んするに必ずと誘はれければ、通清めでたき事に逢ひたりと思ひて、やがて破車に乗りて行く

關白殿一藤原基
通

ほどに、後より車二つ三つばかりして人の來れば、疑なきこの左大臣のおはすると思ひて、しりの簾をかきあけて、あなうたてく、疾くくおはせと、扇を開いて招きけり。早う關白殿の物へおはしますなり。招くを見て、御供の隨身馬を走らせて、驅け寄せて車の尻の簾をかり落してけり。その時ぞ通清あわてさわぎて、前より轉び落ちける程に烏帽子落ちにけり。いとく不便なりけりとか。好きぬるものは少しをこにもありけるにや。

極樂寺の僧仁王經の驗を施す事

これも今は昔、堀川太政大臣と申す人、世心地大事に煩ひ給ふ。御祈どもさまなくにせらる。世にある僧どもの参らぬはなし。参り集ひて御祈どもをす、殿中騒ぐ事がぎりなし。こよに極樂寺は殿の造り給へる寺なり、その寺に住みける僧ども、御祈せよといふ仰せもなかりければ、人も召さず、この時に或僧の思ひけるは、御寺に安く住むことは殿の御

○今昔十四、極
樂寺僧仁王經
施驗驗語參照
堀川太政大臣一
基經、刊本「兼通
公」とあるは誤
なり
世心地一流行病
極樂寺一深草に
あり

緒—細木の枝の
棒をいよ

徳にてこそあれ、殿うせ給ひなば世にあるべきやうなし、召さすとも参らんとて、仁王經を持ち奉りて、殿に参りて、物さわがしかりければ、中門の北の廊の隅に屈まり居て、つゆ目も見かくる人もなきに、仁王經を他念なく讀み奉る。二時ばかりありて殿仰せらるよやう、極樂寺の僧某の大徳やこれにあると尋ね給ふに、或人中門の脇の廊に候ふと申しければ、それ此方へ呼べと仰せらるよに、人々あやしと思ひ、若干のやんごとなき僧をば召さずして、かく参りたるをだによしなしと見居たるをしも、召しあれば、心もえす思へども、行きて召すよしを言へばまるる。高僧どもの著き並びたる後の椽に屈まり居たり。さて参りたるかと問はせ給へば、南の簀子に候ふよし申せば、内へ呼び入れよとて、臥し給へる所へ召し入れらる。無下に物も仰せられず重くおはしつるに、この僧召すほどの御氣色、こよなくよろしく見えければ、人々怪しく思ひけるに、の給ふやう、寢たりつる夢に、恐しけなる鬼どもの、我身をとりにぐに打ち領じつるに、鬘づら結ひたる童子の櫛持ちたるが、中門の方より入り來て、櫛してこの鬼どもを打ち拂へば、

鬼ども皆逃げ散りぬ、何ぞの童のかくはするぞと問ひしかば、極樂寺の某がかく煩はせ給ふ事、いみじう歎き申して、年比讀み奉る仁王經を、今朝より中門の脇に候ひて、他念なく讀み奉りて祈り申し侍る、その聖の護法のかくやませ奉る惡鬼どもを、追ひ拂ひ侍るなりと申すと見て、夢覺めてより、心地の搔い拭ふやうによければ、そのよろこびいはんとて呼びつるなりとて、手を摺りて拜ませ給ひて、棹にかよりたる御衣をめしてかづけ給ふ。寺にかへりて、猶々御祈よく申せと仰せらるれば、喜びて罷り出づる程に、僧俗の見思へる氣色やんごとなし。中門の脇に、終日に屈み居たりつる、覺えなかりしに、殊の外美々しくぞ罷出にける。されば人の祈は、僧の淨不淨にはよらぬ事なり、唯心に入りたるが驗あるものなり。母の尼して祈をばすべしと、昔より言ひ傳へたるものことよろなり。

覺えなかりしに
—中門に居たる
時は人の注意を
ひかざりしに
母の尼して云々
—古語なり

○今昔十七、生
江世經仕吉野天
女得富語參照

伊良縁の世恒毘沙門御下文の事

今は昔、越前の國に伊良縁の世恒といふ者ありけり。取りわきて仕うまつる毘沙門に、物も喰はで物のほしかりければ、助け給へと申しけるほどに、門にいとをかしけなる女の、家主に物言はんとの給ふといひければ、誰にかあらんとて出で逢ひたれば、土器に物を一盛、これ喰ひ給へ、物ほしとありつるにとて取らせたれば、喜びて取りて入れて、唯少し喰ひたれば、やがて飽き充ちたる心地して、二三日は物もほしからねば、これを置きて、物のほしき折ごとに、少しづつ喰ひてありける程に、月比過ぎて、この物も失せにけり。いかどせんずるとて、又念じ奉りければ、又ありしやうに人の告げければ、初めにならひて感ひ出でて見れば、ありし女房の給ふやう、これ下文奉らん、これより北の谷峯百町を越えて中に高き峯あり、それに立ちてなりたと呼ばる物出で來なん、それにこの文を見せて、奉らん物を受けよと言ひて往ぬ。この下文を見れば、米二斗わたすべし

とあり。やがてそのまゝ行きて見れば、實に高き峯あり。それにてなりたと呼ばば、恐しけなる聲にて答へて出で來たるものあり。見れば額に角おひて目ひとつあるもの、赤き禪したるもの出で來て跪きて居たり。これ御下文なり、この米得させよといへば、さる事候ふとて下文を見て、これは二斗と候へども、一斗を奉れとなん候ひつるなりとて、一斗をぞ取らせたりける。そのまゝに受け取りて歸りて、その入れたる袋の米を使ふに、一斗盡きせざりけり。千萬石取れども、唯同じやうにて一斗は失せざりけり。これを國守聞きて、この世恒を召して、その袋我に得させよと言ひければ、國の内にある身なればえいなびずして、米百石の分奉るといひて取らせたり。一斗取れば又出できくしてければ、いみじき物備けたりと思ひて持たりける程に、百石取りはてたれば米失せにけり。袋ばかりになりぬれば、本意なくて返し取らせたり。世恒が許にて、又米一斗出で來にけり。かくてえもいはぬ長者にてぞありける。

相應和尚一、元亨
釋書卷十に傳あり、
近江國淺井郡の人なり、天
長八年誕生、延喜
十八年十一月二
日寂年八十八
都卒の内院一都
卒天に内院外院
あり、内院は彌
勒の居所なり
明王一不動尊

相應和尚都卒天にのぼる事付染殿の后祈り奉る事

今は昔、叡山無動寺に相應和尚といふ人おはしけり。比良山の西に、葛川の三瀧といふ所にも通ひて行ひ給ひけり。その瀧にて不動尊に申し給はく、我を負ひて都卒の内院彌勒菩薩の御許に奉て行き給へと、あながちに申しければ、極めて難き事なれど、強ひて申す事なれば、率て行くべし、その尻を洗へと仰せければ、瀧の尻にて水あみ尻能く洗ひて、明王の頭に乗りにて都卒天に登り給ふ。こよに内院の門の額に、妙法蓮華と書かれたり、明王の給はく、これへ参入の者はこの經を誦して入れ、誦せざれば入らずとの給へば、遙に見上げて相應の給はく、我この經よみは讀み奉る、誦する事いまだ叶はずと。明王さては口惜しき事なり、その義ならば参入叶ふべからず、歸りて法華經を誦して後参り給へとて、掻き負ひ給ひて葛川へ歸り給ひければ、泣き悲み給ふ事かぎりなし。さて本尊の御前にて經を誦し給ひて後、本意を遂げ給ひけりとなん。その不動尊は今に無

染殿の后一、文徳
天皇の皇后、清
和帝の御母

信濃布一木曾の
麻布

動寺におはします等身の像にてぞましくける。その和尚、かやうに奇特の效驗おはしければ、染殿の后靈氣に惱み給ひけるを、或人申しけるは、慈覺大師の御弟子に、無動寺の相應和尚と申すこそ、いみじき行者にて侍れと申しければ、召しにつかはす、即ち御使に連れて参りて中門に立てり。人々見れば、長高き僧の鬼の如くなるが、信濃布を衣に著、楹の平足駄をはきて、大木櫃子の念珠を持てり。その體御前に召し上ぐべきものにあらず、無下の下種法師にこそとて、唯寶子の邊に立ちながら加持申すべしと、各申して、御階の高欄の下にて、立ちながら候へと仰せ下しければ、御階の東の脇の高欄に立ちながら押しかよりて祈り奉る、宮は寢殿の母屋に伏し給ふ。いと苦しけなる御聲時々御簾の外に聞ゆ。和尚纒にその御聲を聞きて、高聲に加持し奉る、其聲明王も現じ給ひぬと、御前に候ふ人々身の毛よだちておほゆ。暫しあれば、宮紅の御衣二つばかりに押し包まれて、鞠の如く簾の中より轉び出させ給うて、和尚の前の寶子に投げ置き奉る、人々さわぎていと見苦し。内へ入れ奉りて、和尚も御前に候へといへども、和尚かゝる乞



兒の身にて候へば、いかで罷り上るべきとて更に上ら^{のほ}ず。初め召し上げられざりしを、安からず憤り思ひて、唯寶子にて宮を四五尺あけて打ち奉る。人々しわびて、御几帳どもをさし出して立てかくし、中門を鎖して人を拂へども、極めて顯露なり。四五度ばかり打ち奉りて、投げ入れく祈りければ、もとの如く内へ投げ入れつ。其後和尚まかりいづ。暫し候へと留^まむれども、久しく立ちて腰痛く候ふとて、耳にも聞き入れずして出でぬ。宮は投げ入れられて後、御靈氣^{かたものけい}さめて御心地爽快^{さつやく}になり給ひぬ。驗徳あらたなりとて、僧部に任すべきよし宣下せらるれども、かやうの乞兒^{かたが}は、なでふ僧綱になるべきとて返し奉る。その後も召されけれど、京は人を賤しうする所なりとて、更に參らざりけりとぞ。

仁戒上人往生の事

これも今は昔、南京に仁戒上人といふ人ありけり、山階寺の僧なり。才學寺中に列ぶ輩

なし。しかるに俄に道心を起して、寺を出でんとしけるに、その時の別當興正僧都、いみじう惜みて制し留めて出し給はず。しわびて、西の里なる人の女を妻にして通ひければ、人々やうく嘯き立ちけり。人に普く知らせんとて、家の門にこの女の頭に抱きつきて、後に立ち添ひたり。行きとほる人見て、あさましがり、心憂がる事かぎりなし。徒物に
なりぬと人に知らせんためなり。さりながら、この妻とあひ具しながら更に近づくことなし。堂に入りて、終夜眠らずして涙を落して行ひけり。この事を別當僧都聞きて、いよいよ尊みて呼び寄せければ、しわびて逃けて、葛下郡の郡司が掣になりけり。念珠などをわざと持たずして、唯心中の道心はいよく堅固に行ひけり。此所に添下郡の郡司、この上人に目を留めて深く尊み思ひければ、跡も定めずありきける後に立ちて、衣食沐浴等を營みけり。上人思ふやう、いかに思ひて、この郡司夫妻は懇切に我を訪ふらんとて、その心を尋ねければ、郡司答ふるやう、何事か侍らん、唯尊く思ひ侍ればかやうに仕るなり、但し一言申さんと思ふ事ありといふ。何事ぞと問へば、御臨終の時如何

腹あしくおはす
る一腹立ち易き

にしてか逢ひ申すべきといひければ、上人心に任せたることのやうに、いと易き事にありなんと答ふれば、郡司手を摺りて喜びけり。さて年比過ぎて或冬雪降りける日、暮方に上人郡司が家に来ぬ。郡司喜びて例の事なれば、食物下人どもにも營ませず、夫婦手づから自らしてめさせけり。湯などもあみて臥しぬ。曉は又郡司夫婦疾く起きて、食物種に營むに、上人の臥し給へる方香しき事かぎりなし、にはひ一家に充ち満てり。これは名香など焼き給ふなめりと思ふ。曉は疾く出でんと給ひつれども、夜明くるまで起き給はず、郡司御粥出できたり、このよし申せと御弟子にいへば、腹あしくおはする上人なり、悪しく申して打たれ申さん、今起き給ひなんといひて居たり。さる程に日も出でぬれば、例はかやうに久しくは寢給はぬに、怪しと思ひて、寄りておとなひけれど音なし。引きあけて見れば、西に向ひ、端坐合掌してはや死に給へり、あさましき事かぎりなし。郡司夫婦御弟子どもなど、悲み泣きみ、かつは尊み拜みけり。曉香しかりつるは、極樂の迎へなりけりと思ひあはず。終に逢ひ申さんと申しよかば、こゝに來たり給ひ

てけるにこそと、郡司泣くく、葬送の事もとりさたしてけるとなん。

秦始皇天竺より來たる僧禁獄の事

○今昔六、釋迦
秦始皇時天竺僧
渡語參照

西天一西天竺

今は昔、唐土の秦の始皇の代に天竺より僧渡れり。帝あやしみ給ひて、これは如何なる者ぞ、何事によりて來たれるぞ。僧申していはく、釋迦牟尼佛の御弟子なり、佛法を傳へんために、遙に西天より來たり渡れるなりと申しければ、帝腹立ち給ひて、その姿極めてあやし、頭の髮禿なり、衣の體人にたがへり、佛の御弟子と名のる、佛とは何ものぞ、これは怪しきものなり、たどに返すべからず、囚獄に籠めよ、今より後かくの如く怪しき事言はんものをば、殺さしむべきものなりといひて、囚獄に据ゑられぬ。深く閉ぢ籠めて重く戒めて置けと、宣旨を下されぬ。囚獄の司の者宣旨のまゝに、重く罪ある者おく所に籠めて置きて、戸に數多ぢやうさしつ。此僧惡王に逢ひて、かく悲しき目を見る、我本師釋迦牟尼如來、滅後なりともあらたに見給ふらん、我を助け給へと念じ入りたる

殺さしむべき
「こちさしむべき」
の斬か

紫磨黄金一紫金
ともいふ、黄金
にして紫色を帯
ぶる上品をいふ

眞には渡りける
一後漢の明帝永
平八年始めて佛
法を傳ふ

○今昔十、莊子
□許偃栗語參照

監河侯一刊本に
假名にて「かん
あとう」とある
は誤寫なり

に、釋迦佛丈六の御姿にて、紫磨黄金の光を放ちて、空より飛び來たり給ひて、この囚獄の門を踏み破りて、この僧を取りて去り給ひぬ。その序に多くの盜人ども皆逃げ去りぬ。囚獄の司、空に物の鳴りければ出でて見るに、金の色したる僧の光を放ちたるが、大さ丈六なる空より飛び來たりて、囚獄の門を踏み破りて、籠められたる天竺の僧を取りて行く音なりければ、この由を申すに、帝いみじく恐ぢ懼り給ひけりとなん。その時に渡らんとしける佛法、世下りて後、漢には渡りけるなり。

後の千金の事

今は昔、唐土に莊子といふ人ありけり。家いみじう貧しくて、今日の食物絶えぬ。隣に監河侯といふ人ありけり、それがもとへ今日喰ふべき料の粟を乞ふ。河侯がいはく、今日五日ありておはせよ、千兩の金を得んとす、それを奉らん、いかでかやんごとなき人に、今日參るばかりの粟をば奉らん、返すくおのが恥なるべしといへば、莊子のいはく、昨

河伯神一水神

うるへ一潤せ

後の千金一古語

名譽せり一言ひ
はやせりの意

○今昔十、孔子
寫放盜跖其家
物語語彙

日道を罷りしに、後によばふ聲あり、願れば人なし、唯車の輪の跡のくほみたる所に溜りたる少水に、鮒一つふためく、何ぞの鮒にかあらんと思ひて寄りて見れば、少しばかりの水にのみじう大なる鮒あり、何ぞの鮒ぞと問へば、鮒のいはく、我は河伯神の使に江湖へ行くなり、それが飛び損ひてこの溝に落ちいらたるなり、喉乾き死なんとす、我を助けよと思ひて呼びつるなりといふ。答へていはく、我今二三日ありて、江湖といふ所にあそびしに往かんとす、そこに持て行きて放さんといふに、魚のいはく、更にそれまで待つまじ、唯今日一提ばかりの水をもて喉をうるへよと言ひしかば、さてなん助けし、鮒のいひし事我身にしりぬ、更に今日の命物喰はずば生くべからず、後の千金更に益なしとぞいひける。それより後の千金といふ事名譽せり。

盜跖孔子と問答の事

これも今は昔、唐土に柳下惠といふ人ありき。世の賢きものにして人に重くせらる。そ

賢く一都合よく

の弟に盜跖といふ者あり、一つの山懐に住みて、もろくの悪しき者を招き集めて、おのが伴侶として、人の物をば我物とす。ありく時は、この悪しきものどもを具する事二三千人なり。道に逢ふ人を滅し恥を見せ、善からぬ事の限を好みて過すに、柳下惠道を行く時に孔子に逢ひぬ。何處へおはするぞ、自ら對面して聞えんと思ふ事のあるに、賢く逢ひ給へりといふ。柳下惠いかなる事ぞと問ふ。教訓し聞えんと思ふ事は、其許の舍弟、もろくの悪しき事の限を好みて、多くの人を歎かする、など制し給はぬぞ。柳下惠答へていはく、おのれが申さん事をあへて用ふべきにあらず、されば歎きながら年月を経るなりといふ。孔子のいふ、其許教へ給はずば我行きて教へん、いかどあるべき。柳下惠いふ、更におはすべからず、いみじき詞を盡して教へ給ふとも、靡くべき者にあらず、かへりて悪しき事出で來なん、あるべきことにあらず。孔子いはく、悪しけれど人の身を得たる者は、おのづから善き事をいふにつく事もあるなり、それに悪しかりなん、よも聞かじといふ事は僻事なり、よし見給へ、教へて見せ申さんと、詞を放ちて盜

孔子たふれす
「弘法も筆のあ
やまち」といふ
類の語なり

すといふ。時に孔子又いふべき事覺えずして、座を立ちて急ぎ出でて馬に乗り給ふに、よく憶しけるにや、轡を二度取りはづし、鎧をしきりに踏みはづす。これを世の人孔子たふれすといふなり。

萬治二己亥年初冬日

洛陽今出川書堂
林和泉掾板行

今物語

見くまへかす
くまへと目を
動かす

跖が許へおはしぬ。馬よりおり門に立ちて見れば、ありとあるもの猪鳥を殺し、もろもろの悪しきことを集へたり。人を招きて、魯の孔子といふ者なん参りたるといひ入るゝに、即ち使歸りていはく、昔に聞く人なり、何事によりて來れるぞ、人を教ふる人と聞く、我を教へに來れるか、我心に叶はど用ひん、叶はずば肝膽きもたまに作らんといふ。その時に孔子進み出でて、庭に立ちて、まづ盜跖を拜みてのばりて座に著く。盜跖を見れば、頭の髪は上ざまにして、亂れたる事違のごとし。目大にして見くるべかす。鼻を吹きいからし、牙を噛み鬚をそらして居たり。盜跖がいはく、汝來たれるゆゑはいかにぞ、慥に申せと、怒れる聲の高く恐しけなるをもていふ。孔子思ひ給ふ、かねても聞きし事なれど、かくばかり恐しき者とは思はざりき、容貌有様かたちありさままで人とはおほえず、肝心も碎けてふるはるれど、思ひ念じていはく、人の世にあるやうは道理をもて身のかぎりとし、心のおきてとするものなり。天を戴き地を踏みて四方をかためとし、朝家あさやけを敬ひ奉り、下を憐みて人に情なまじを致すを事とするものなり、しかるにうけ給はれば、心のほしきまよ

針さすばかり云
云一僅少の地を
も領せず

木を折りて一
「木をほりて」の
衍か
魯にうつされ一
魯より追ひ出さ
るゝをいふ

に悪しき事をのみ事とするは、當時は心に叶ふやうなれども、終すまひ悪しきものなり、されば猶人は善きに随ふを善しとす、然れば申すに随ひていますかるべきなり、その事申さんと思ひて参りつるといふ。時に盜跖いかつち雷のやうなる聲をして笑ひていはく、汝が言ふ事ども一つも當らず、そのゆゑは昔堯舜とまうす二人の帝世にたふとまれ給ひき、しかれどもその子孫世に針さすばかりの所を知らず、又世に賢き人は伯夷叔齊なり、首陽山に伏せりて飢ゑ死にき、又其許もとの弟子に顔回といふ者ありき、賢く教へ給ひしかども、不幸にして命みじかし、又同じき弟子にて子路といふ者ありき、衛の門にして殺されき、しかあれば賢き輩は遂にかしこき事もなし、我又悪しき事を好めど殃身に來らず、譽めらるゝもの四五日に過ぎず、謗らるゝもの又四五日に過ぎず、悪しき事も善き事も、長く譽められ長く謗られず、しかれば我好みに随ひふるまふべきなり、汝又木を折りて冠にし、皮をもちて衣とし、世をおそりおほやけに懼おそち奉るも、二度魯にうつされ跡を衛にけづらる、などかしこからぬ、汝がいふ所誠まことに愚おろかなり、速に走りかへりね、一も用ふべから

孔子たふれず
「弘法も筆のあ
やまち」といふ
類の語なり

すといふ。時に孔子又いふべき事覺えずして、座を立ちて急ぎ出でて馬に乗り給ふに、よく憶しけるにや、轡を二度取りはづし、鉛をしきりに踏みはづす。これを世の人孔子たふれすといふなり。

萬治二己
亥年初冬日

洛陽今出川書堂
林和泉掾板行

今
物
語

今物語

大納言なりける人、内へまゐりて女房あまた物語しける所にやすらひければ、此人の扇を手にとりて見けるに、辨の姿すがたしたりける人を書きたりけるを見て、此女房ども、鳴く音ねなそへそ野邊の松蟲と、口々にひとりごちあへるを、此人聞きてをかしと思ひたるに、奥のかたより只今人の來たるなめりと覺ゆるに、是はいかに鳴く音ねなそへそと覺ゆるはと、したり顔にいふ音ねのするを、この今きたる人しばしたためらひて、いと人にくよ優やさなるけしきにて、源氏の下した襲がきのしりは短かよるべきかはとばかり、忍びやかに答ふるを、このをとこあはれに心にくよ覺えて、ぬしゆかきものかな、誰ならんとうちつけに浮きたちけり。堪ふべくも覺えざりければ、後にえさらぬ人に尋ねければ、近衛院の御母ひが

下襲のしり一帯をいよ

事かうのとの御つほねと呷きければ、いでやことわりなるべし。その後のちはたぐひなき物思ひになりけり。

源氏大かたの秋の別れもかなしきに鳴くねなそへそ野邊の松蟲

薩摩守忠度といふ人ありき。ある宮腹の女房に物申さんとて、扇あふらのうへざまにてためらひけるが、ことの外まはに夜ふけにければ、扇をはらくと使ひ鳴らして聞き知らせければ、此扇の心しりの女房、野もせにすだく蟲の音やと、ながめけるを聞きて、扇を使ひやみにけり。人しづまりて出あひたりけるに、この女房扇をばなどや使ひ給はざりつるぞと言ひければ、いさかしがましとかや聞えつればと言ひたりける。やさしかりけり。

かしがまし野もせにすだく蟲の音よ我だに物はいはでこそ思へ

或殿上人さるべき所へ参りたりけるに、折しも雪降りて月朧なりけるに、中門のいたにさぶらひて、寢殿なる女房にあひしらひけるが、此朧月はいかどし候ふべきと言ひたりければ、女房返事はなくて、取りあへず内うちより疊たたみを推し出だしたりける心早さ、いみ

○此話源氏集十訓抄にも出づ

かしがまし云々
新撰御歌に
イ、曾根好忠の
歌、空穂物語に
は第二句「草葉
にかくる」とあ
り
心早さ一敏才

じかりけり。

新古今照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき

ある殿上人ふるき宮腹へ夜ふくる程に参りて、北の對たいの馬道うまぢにたどすみけるに、扇におるよ人の氣色あまたしければ、ひき隠れてのぞきけるに、御扇の遣水やみづに螢の多くすだきけるを見て、さきに立ちたる女房の、螢火みだれ飛びてと打ちながめたるに、つぎなる人、夕殿に螢飛んでとくちささむ。しりに立ちたる人、かくれぬものは夏蟲のと、花やかにひとりごちたり。とりぐにやさしくも面白くて、此男何となくふしなからんも本意ほんいなくて、ねずなきをし出でたりける。さきなる女房、ものおそろしや、螢にも聲のありけるよとて、つやく騒さわぎたるけしきなく、うち静まりたりける、あまりに色深く悲しく覺えけるに、今ひとり鳴く蟲よりもこそと、取り成したりけり。是もおもひ入りたるほど奥ゆかしくて、すべてとりぐにやさしかりける。

音もせでみさをに燃ゆる螢こそ鳴く蟲よりもあはれなりけれ

○此話十訓抄及び悦目抄に見ゆ

ふしなからんも
一節なきも
ねずなき一風鳴
つやく一絶え
て

みさをに燃ゆる
一後拾遺には
「あもひにもゆ
る」とあり

螢火亂飛秋已近 辰星早沒夜初長

夕殿螢飛思悄然

後撰つよめどもかくれぬ物は夏蟲の身よりあまれる思ひなりけり

螢火云々元續の詩
夕殿云々白樂天の詩
○此話十訓抄に
いづ
もと「みかど」
の折なるべし
とみの事―意用

近き御代に五節の比、ゆかりにふれて誰とかやの御局へ、或女のやんごとなき忍びて参りたりける事ありけるを、ちと聞召していかで御覽せんと、おほしけるまよに、俄に推し入らせ給ひけり。取りあへずともし火を人の消ちたりければ、御ふところより櫛をいくらも取りいでて、火櫃の火にうち入れ給ひたりければ、奥まで見えて、よくく御覽じけり。御心の風情興ありて、いとやさしかりけり。此比の事とかや、ある田舎人優なる女をかたらひて、都に住みわたりけるが、とみの事ありて田舎へ下りなんとしける其夜となりて、此女例ならずうちしめりて、うしろむきて寝たりけるを、男いたう恨みてけり。いつまでかかくも厭はれまらせん、只今ばかり向き給ひてあれかしと言ひけるに、この女、

今さらに背くにはあらず君なくてありぬべきかと習ふばかりぞ

と言ひたりければ、男めで感ひて、田舎下りとまりにけるとかや。いとやさしくこそ。

大納言なりける人、日比心をつくされける女房のもとにおはして、物語などせられけるが、世に思ふやうならで、明けゆく空も猶心もとなかりければ、あからさまの様に立ち出でて、隨身に心を合せて、今しばしありて、まことや今宵は内裏の番にて候ふものを、もし思しめし忘れてやと、おとなへと教へて、うちへ入りぬ。その儘にしばしありて、無骨に隨身いさめ申しければ、さる事あり、今夜はけに心おくれしにけりとて、とりあへず急ぎ出でんとせられける氣色を見て、この女房心得て、やがていと恨しけなるに、をりふし雨のはらくと降りたりければ、

ふれや雨雲のかよひぢ見えぬまでこころ空なる人やとまると

いうなる氣色にて、わざとならず打ちいでたりけるに、此大納言なにかの言はなくて、其夜とまりにけり。後までも絶えず音づれられけるはいとやさしくこそ。かく申すは後

あからさま―か
りそめ

心おくれしにけ
り―氣づかざり

かれ〜中の
疎くなること

徳大寺左大臣實定ときこえし人の事とかや。
粟田口の別當入道といひける人、わかて人を思ひけるに、やう〜かれ〜になりて、
後におもひ出でて、絲の有りけるをやりたりければ、絲をば返して、歌をなんよみたり
ける。

わすられて思ふばかりのあらばこそかけても知らめ夏引の絲

或藏人の五位の月くまなかりける夜、革堂へ参りけるに、いと美うつくしけなる女房の、ひと
り参りあひたりける、見すてがたく覺えけるまよに、言ひよりてかたらひければ、大方おほかた
さやうの道みちには叶なひがたき身にてなんと、やう〜に言ひしろひけるを、猶堪なほへがたく
覺えて、歸りけるにつきて行きければ、一條河原になりけり。女房見かへりて、

玉みくりうきにしもなどねをとめて引きあけどころなき身なるらん

とひとりごちて、きよめが家の有りけるに入りけり。男それしもいとあはれに不思議ふしぎ
と覺えけり。

みくり水草の
名、三稜草

○此話十訓抄及
び平家物語七に
見ゆ

あかぬ別れの
新古今三、小侍
従、待つよひに
更け行くかねの
聲きけはあかぬ
わかれの鳥はも
のかは

しる所一領地

大納言なりける人、小侍従と聞えし歌よみに通はれけり。ある夜物いひて曉かへられけ
るに、女の家の門をやりいだされけるが、きと見かへりたりければ、此女名残を思ふかと
おほしくて、車寄くるまよせの簾すだれにすきて、ひとり残りたりけるが、心にかより覺えてければ、供
なりける藏人くらねりに、いまだ入りやらで見送りたるが、ふり棄てがたきに、何とまれ言ひてこ
との給ひければ、ゆよしき大事かなと思へども、程經ほどべき事ならねば、やがて走り入り
ぬ。車寄の櫓たもとのきはにかしこまりて、申せと候ふとは、左右さうなくいひ出でたれど、何と
いふべき言ことばの葉はも覺えぬに、折しもゆふつけ鳥聲々に鳴き出でたりけるに、あかぬ別れ
のといひける事の、きと思ひいでられければ、

新拾遺物かはと君がいひけん鳥の音のけさしもなどか悲しかるらん

とばかり言ひかけて、やがて走りつきて、車の尻しりにのりぬ。家に歸りて中門におりて後、
さても何とか言ひたりつると問ひ給ひければ、かくこそと申しければ、いみじくめでた
がられけり。さればこそ使つかにははからひつれとて、感のあまりにしる所などたびたりけ

きりて出てたりける一亂暴せし也

隆祐侍従一家隆脚の男

るとなん。此藏人は内裏の六位など經て、やさし藏人といはれけるものなりけり。この大納言も後徳大寺左大臣の御事なり。能登前司橋長政といひしは、今は世を背きて法名寂縁とかや申すなんめり。和歌の道をたしなみて、其名きこゆる人也。新勅撰えらばれし時、三首とかや入りたりけるを、すくなしとてきりて出でたりける、すこしはけしきには似たれども、道を立てたる程はいとやさしくこそ。其人此比あるやんごとなき大臣家に、和歌の會せられけるに、述懐の歌をよみたりける。

あふけども我身たすくる神なつきさてやはつかの空を眺めん
と詠みたりければ、満座感歎して此歌よみたためて、主も稱美のあまりに、國の所ひとつやがて賜はせたりけり。道の面目、世の繁昌、不思議の事也。末代にもさすがかよるやさしき事の残りたるにこそ。此事を聞きて隆祐侍従いひやりける歌、
みがきける君に逢ひてぞ和歌の浦の玉も光をいと添ふらん

吉水前大僧正一慈圖

左のもとと頼長
かくし題一新拾遺二條院御時
ひたりまきのふちふちきり火を
けをこめて河に
よせて歌奉るべき
よし仰せあり

吉水前大僧正と聞えしは、今は慈鎮和尚と申すにや、天王寺の別當に成りて拜堂ありけるに、上童おほく具せられたりける中に、たれがしとかやいひける兒を、天王寺にありける女、堪へがたう思ひかけて、紅梅の檀紙に、心も及ばず葦手を書きて、此兒のもとへおこせたりける、ぬしも餘所ながらもつやく見知りたる人もなくて、むけに恥がましくありぬべかりけるに、此兒うち案するけしきなりければ、何とすべきにかと、人々まばゆく思ひたりけるに、やがてその葦手のうへに、
おほつかななにはにかけける言の葉ぞ都にすめば知らぬあしでを

と書きてやりたりける、取りあへずいとあしからずや。
宇治の左のおとどの御前に、銀を桐火桶につませられて、頼政卿のいまだ若かりける時、召ありてきり火桶とわが名を、かくし題にて歌つかうまつりて、是をたまはれと仰事ありければ、とりもあへず、
宇治川の瀬々の白浪おちたぎりひをけさいかによりまさるらん

ければ、みづか
ちの名をそへて
よみ侍りける、
從三位賴政、水
ひたりまきのふ
ちふち下回
ひをけさし水
魚、今朝

油綿一和名鈔、
「容衛具云、源、釋
名云、人變恒枯
綿、以此今源澤
也、俗用脂綿二
字阿布良
ともし火云々
此連歌の作者菟
玖波集と反對に
なれり

とよみたりけり。めでさせ給ひけるとなん。

秦公春といひける隨身、宇治の左大臣殿につかうまつりけるが、御沓をまるらせけるが、御沓のしきに千鳥を書かれたりけるを見て、

菟玖波沓のうらにも飛ぶ千鳥かな

といひでたりけるを、取次ぐ殿上人もいはざりけるに、大殿しばし御沓をはき給はで、

同難波なるあしの入江をおもひ出て

と仰せられたりける、いとやさしかりけり。

待賢門院の堀川、上西門院の兵衛おとどひなりけり。夜深くなるまでさうしを見るに、

ともし火のつきたりけるに、油綿をさしたりければ、よにかうばしく匂ひけるを、堀川、

菟玖波ともし火はたきものにこそ似たりけれ

といひたりければ、兵衛とりもあへず、

同ちやうしがしらの香やにはふらん

とつけたりける、いと面白かりけり。

或者所の前を春の頃、修行者の不思議なるが通りけるが、檜笠に梅の花を一枝さしたりけるを、兒ども法師などあまた有りけるが、世にをかしげに思ひて、ある兒の梅の花笠きたる御房よといひて笑ひたりければ、此修行者立ちかへりて、袖をかき合せて、ゑみゑみと笑ひて、

身のうさの隠れざりけるものゆゑに梅の花笠きたる御房よ

と仰せられ候ふやらんと言ひたりければ、この者どもこはいかにと、思はずに思ひて、言ひやりたるかたもなくぞ有りける。左右なく人を笑ふ事あるべくも無きことにや。

或所にて此世の連歌の上手と聞ゆる人々より合ひて連歌しけるに、其門のしたに法師のまことに怪しげなるが、頭はをつかみに生ひて、紙衣のほろくとあるうち著たるが、つくづく此連歌を聞き有りければ、何程の事を聞くらんと、をかしと思ひて侍るに、此法師や久しく有りて、うちへ入りて椽のきはにるたり。人々をかしと思ひてあるに、遙

思はずに思ひて
意外の事に思
ひて

をつかみ一髪の
つかまざるくばか
り生ひたる也

かにありて、賦物は何にてやらんと問ひければ、其中にちと荒涼なる者にて有りけるやらん、餘りにをかしく悔らはしきまよに、何となく、

莫秋波くよりもとかす足もぬらさず

といふぞと言ひたりければ、此法師打聞きて二三返ばかり詠じて、面白く候ふものかなといひければ、いとどをかしと思ふに、さらば恐れながら付け候はんとて、

名にしおふ花の白河わたるには

と言ひたりければ、いひ出だしたりける人を初めて、手をうちてあさみけり。さて此僧はいとま申してとてぞ走り出でける。後に此事京極中納言きよ給ひて、いかなる者にかと、返すべくゆかしくこそ、いかさまにても只者にてはよもあらじ、當世は是ほどの句などつくる人は有りがたし、あはれ歌よみの名人たちは、たよかうかきたりけるものかな、世の中のやうに恐しきものあらじ、よきもあしきも人を悔る事あるまじき事とぞいはれける。

京極中納言一定家

たよかう一異本の「そくかう」とあるよし、そくかうは「そく」にて、俗にいふ歌をかくの意

ありきたがひ一
出逢ひ

しれがましきぞ
一本しれが
ましきぞ

かまち一観音

伏見中納言といひける人のもとへ、西行法師行きて尋ねけるに、あるじはありきたがひたる程に、さぶらひの出でて、何事いふ法師ぞといふに、椽に尻かけて居たるを、けしかる法師のかくしれがましきぞと思ひたる氣色にて、侍共ならみおこせたるに、簾の内に箏の琴にて秋風樂を弾きすましたるを聞きて、西行此侍に物申さんといひければ、にくしとは思ひながら立寄りて、何事ぞといふに、簾のうちへ申させ給へとて、

ことに身にしむ秋の風かな

といひでたりければ、にくき法師のいひごとかなとて、かまちをはりてけり。西行はふはふ歸りてけり。後に中納言の歸りたるに、かよるしれ物こそ候ひつれ、はりふせ候ひぬと、かしこ顔に語りければ、西行にこそありつらめ、不思議の事なりとて、心うがられけり。此侍をばやがて追ひ出だしてけり。

後白川院の御時、日吉社に御幸ありて一夜御泊りありて、次の日御下向ありけるに、雨の降りければ、御車近うつかうまつりける上達部の中に、

菟玖波きのふ日よしと思ひしものを

といふ連歌の出来たりけるを、おほかた付くる人なくて程へければ、左馬權頭なりける人の、はるかに先なりけるを召しかへして、是付けよと仰せごと有りければ、ほどなく

同今日は皆雨ふるさとへかへるかな

と付けたりければ、安かりけることを口惜しくも思ひよらざりけると、人々いひあへりけり。此左馬權頭加茂の臨時祭の舞人なりけるに、曉つかひなりける人を打具して歸りたちにまゐりけるが、雪いたく降りて袖にたまりけるを見て、

同あをすりの竹にも雪はつもりけり

といひたりけるに、使なりける人は付けざりければ、秦兼任人長にて打具してけるが、馬を打ちよせく、氣色ばみければ、兼任が付けたると覺ゆるぞといはれて、下藤はいかでかとはよく言ひけるを、猶せめ問はれて、

同色はかざしの花にまがひて

まゐりける一本「まゐりたる」

人長一舞人陪從の長

はくしく一腹字あるにや不明

今参一新参

と付けたりける。まことに兼久、兼方などが子孫と覺えて、いとやさしかりけり。

やんごとなき人のもとに、今参の侍出来にけり。焼繪をめでたくするよし聞えければ、前によびて檀紙に焼繪をせさせけるに、何をか焼き侍るべきといひければ、水に鷺を焼けといはれけるに、打ちうなづきて、

菟玖波伴水にはをしをいかど焼くべき

と口ずさみけるを、あるじ聞き咎めて、同じくは一首になせと言はれければ、かいかしこまりて、

同波の打つ岩より火をば出だすとも

といへりければ、人々皆ほめにけり。

京極太政大臣と聞えける人、いまだ位あさかりける程に、雲居寺の程を過ぎられけるに、贈西上人の家を齎きけるを見て、雑色をつかひにて、

菟玖波ひじりの屋をばめかくしにふけ

京極太政大臣一宗輔位あさかりける程一位低かりける時

といはせて、車を早くやらせけるに、雑色の走りかへる後にうしろに小法師をはしらせて、

同あめの下にもりて聞ゆることもあり

といはせたりける、その程の早さけしからざりけり。

待賢門院の女房加賀といふ歌よみあり。

かねてより思ひしことぞふし柴のこるばかりなる歎きせんとは

といふ歌を、年とし比ひよみてもちたりけるを、同じくはさりぬべき人に言ひむつびて、忘れ

たらんに讀みたらば、集などに入りたらんも優いなるべしと思ひて、いかどありけん、花

園の左のおとどに申しそめてけり。其後思ひの如くやありけん、此歌をまるらせたりけ

れば、大臣殿もいみじくあはれに思しけり。かひなくしく千載集に入りにつけり。世の人

ふし柴の加賀とぞいひける。

松殿の思はせ給ひける女房かれなくになり給ひて後、はかなき御なさけだにも稀まれなりけ

れば、我ながらあらぬかとのみ辿りわび、人の心の花にまかせて、月日を空しく移り行く

花園の左のちとど一有仁

千載集一集三にあり

松殿一基房

せうく一書々

に、宮の鶯う百もさへづりすれども、思ひあれば聞くことをやめつ、梁はりのつばくらめ並ならびすめども、身老ゆればねたまず、遅ち々たる春の日もひとりすめば、いと暮れやらす、せうせうたる秋の夜は空しき床にあかし難くて過ぐしけるに、事のよすがや有りけん、むかへに御車をつかはされたりける、夢現ともわかかねつらん、嬉しとも思ひ定めず。さればとて今更待ちよろこび顔ならんも、いたうつれなく、身ながらもなか／＼疎そましかりぬべければ、是にこそ日頃のつきせぬ歎なげきもあらはさめと思ひつよりて、たけに餘りたりける髪を押し切りて、白き薄うす様につよみて、

今さらに再び物を思へとやいつもかはらぬおなじうき身に

と書付けて、御車に入れて参らせたりける、此人は後にはみそのの尼とて、近くまでも聞えしとかや。

東山の片隅かたすみにあはれに人もかけ見ぬあばらやに、いとやさしくいまだ人馴れぬ女ありけり。庭の萩原招けども、風より外はとふ人もなく、軒端のきはの蓬よもぎしけれども、杉村ならねばか

あはれに一本「あはれて」とあり

ひなくて、月にながめ、嵐にかこちても、心をいたましむるたよりは多く、花を見、郭公を聞きても慰むべきかたは稀なることにて、明し暮すに、清水詣のついでに、思はぬ外のさかしら出来て、至らぬ限なかりし御心に、たと一夜の夢の契を結びまゐらせてける。是も前世を思へばかたじけなかりけれども、さしあたりて歎きに恨をそへて、心のうち晴るよまもなし。甲斐なくありふれど、今一度の言の葉ばかりの御なさけだに待ちかねて、よし是ゆゑ背くべき憂世なりけりと思ひ立ちて、ありし御心知りのもとへつかはしける。

なか／＼に問はぬも人の嬉しきはうき世を厭ふたよりなりけり

とばかり、心にくよ幼びれたる手にて、はなだの薄様に書きたるを、折をうかどひて奏しければ、まことにさる事あり、尋ねざりける心おくれこそと御氣色ありければ、頓て走り向ひて尋ぬるに、さらぬだに荒れたる宿の人住むけしきもなきを、やよ久しくやすらひて、老いたる女ひとり尋ねえて、事の様をくはしく問ひければ、何といふ事は知

はなだ一顧
心もくれ一不注
べき

かはゆき一寝む
べき

り侍らず、あるじは天王寺へ参り給ひぬといへば、やがてそれより天王寺へまゐり、寺をたづぬるに、龜井のあたりにおとなしき尼ひとり、女房二三人ある中に、いと若き尼の殊にたど／＼しけなるがあり。此心しりを見付けて淺ましと思ひけにて、只やがてうつぶして泣くより外の事なし。かたへの者ども聲を立てぬばかりにて、劣る袖なくしほりければ、御使も見捨てて歸るべき心地もせず。おとなしき尼は此人の母なりければ、事のやうにこまかに尋ねけれども、もとより是は思ひつる事なり、何しにかは君の御ゆゑにてさふらふべき、かしこくと言ひもあへず泣きて、其後は答へざりければ、よしなき御使をしてかはゆき事を見つるよと悲しくて、さりとて爰にて世をつくすべきならねば、立ちかへりぬ。此由を奏するに、はしたなの心の立てさまや、心おくれが答に成りつるよとて、甲斐なかりけり。あはれにもやさしくも、長き世の物語にぞなりぬる。みそ野の尼の心といづれか深からん。

或人事ありて遠き國へ流されけるに、年頃心ざし深かりける女の、姫みたるを見捨てて

かきぐりー辿り

行きければ、いかばかりの別れにかありけん、其後此女尋ねゆかんとしけれども、父母ありける故にて、ゆるさどりければ、只一人出て行きけるに、漸く其國までかよぐりつきにけり。腹なる子の生れんとしければ、片山かたやまに生みおとして、著つたりける物にひきつづみて捨て置きて、血つきたる物など洗はんとて、人の家のありけるかたへ、漸うよろほひ行きけるに、此家にはしを集むる音して、流され人の死にたるを葬らんとするなどいふ、殊に怪しく胸つぶれて、くはしく尋ねければ、京なる人を戀ひ悲みて、けさ失せ給ひたるなどいふに、たゞ此人なりけり、言葉もたよす、わなよかれけれど、からくして此死人のもとに行きて見れば、我男なりけり。悲しきこと限りなくて、枕がみにゐて、かく参りたるなり、今一度目見あはせ給へと泣きもまれて、此男いき出でて目を見合せ、此世にては今はいかにも叶ふまじきぞとばかり言ひて、頓つひて又死にけり。さてのみあるべきならねば、はふりけるに、その火に此女飛び入りて焼け死しににけり。腹の中の子を生みおとしけるは、罪の淺かりけるにやとぞ言ひあへりける。一人具したりける女

はふりー那り

大二條殿一教通

見ければ一本
見れば

なも一兩四(兩
無)

の童わらわも共に火に入らんとしけれども、取りとめて此人の有様をくはしく尋ね、生みおとしつる子などをも取りて、村の者の養ひけるとぞ。此事は近き程の事なり。
小式部内侍、大二條殿におほしめされける比ころ、久しく仰せごとなかりける夕暮に、あながちに戀ひ奉りて、端はしちか近ちかくながめ居たるに、御車の音などもなくて、ふと入らせ給ひたりければ、待ちえて夜もすがら語らひ申しける曉がたに、いさよかまどろみたる夢に、絲の付きたる針を御直衣みちえの袖にさすと見て夢さめぬ。さて歸らせ給ひにけるあしたに御名残を思ひ出でて、例の端はしちか近ちかくながめ居たるに、前まへなる櫻の木に絲のさがりたるを怪しと思ひて見ければ、夢に御直衣の袖にさしつる針なりけり、いと不思議なり。あながちに物を思ふ折には、木草なれどもかやうなることの侍るにや。其夜御渡りあること誠にはなかりけり。

小大進と聞えし歌よみ、いとまづしくて太秦うづまさへ参りて、御前の柱に書き付けける歌、
なも藥師やうしあはれみたまへ世の中にありわづらふも同じやまひを

とよみたりければ、程なく八幡の別當光清に相具して、たのしく成りにけり。子などいできて後、もろともに居たりける所近き所に、いもの蔓つるの這よひかよりて、零な餘ご子などのなりたりけるを見て、光清

魂取波伴這ふほどにいもがぬかごはなりにけり

といひたりければ、程なく小大進、

同今はもりもや取るべかるらん

と付けたりける、おもしろかりけり。

ある女房の加茂の糺たすに七日こもりて、まかり出づるとて、物に書きつけける。

鳥の子のたどすの中なかにこもりてかへらん時はとはざらめやは

とよめりければ、あはれとや思召しけん、やがてめでたき人に思はれて、さいはひ人といはれけり。

加茂に常につかうまつりける女房の、久しくまるらざりける夢に、ゆふしでのきれに書

たさう鼠、只
かへらん一明、
聞

きたりけるものを、直衣きたりける人の給はせけるを見れば、

おもひいづや思ひぞいづる春雨に涙とりそへ濡れし姿を

とありけるを見て、夢さめにけり。あはれと思ふ程に、手に物の握られたりけるを見れば、ゆふしでのきれに墨三十一付きたるにて有り。ことにあはれにめでたく、涙もとどまらずぞありける。

嘉祥寺僧都海惠といひける人の、いまだ若くて病大事にて限りなりける比、寝入りたる人俄に起きて、そこなるふみなど取り入れぬぞと、嚴ひびしく言はれけれども、さる文なかりければ、うつよならず覺えて、前なる者ども呆れ怪みけるに、みづから立ち走りて明あかり障しやう子をあけて、立文たてぶみをとりて見ければ、ものども誠に不思議におほえて見る程に、是をひろけて見て、しばし打案じて返事書きてさし置きて、又頓つがて寝入りにけり。起臥かたふたもたやすからずなりたる人の、いかなりける事にかと怪みける程に、しばし寝入りて汗おびたどしく流れて起き上りて、不思議の夢を見たりつるとて語られける。大きな猿さるの藍あゐ摺すりの

立文たる文一
「たる文」の三字
は衍文にて不用
なるべし
遅く取り入れつ
る一取り入れざ
りければの意

正念に住して一
正氣になりて

延應一四條天皇
の御世

水干きたるが、立文たる文を持て來つるを、人の遅く取り入れつるに、自ら是を取りて見つれば、歌一首あり、

新拾遺たのめつよこぬ年月を重ぬれば朽ちせぬ契いかどむすばん

とありつれば、御返事には、

こころをばかけてぞ頼むゆふだすき七のやしろの玉のいがきに

と書きて參らせつる也、是は山王よりの御歌を給はりて侍る也と語られければ、前なる人淺ましく不思議に覺えて、是は只今うつよに侍ること也、是こそ御文よ、又かよせ給へる御返事よといひければ、正念に住して前なる文どもを廣げて見けるに、露たがふことなし。其後病怠りにけり。いと不思議なり。

延應元年正月十九日の曉、或人の夢に清水の地主よりとて御文ありけるを見ければ、

月日のみ杉の板戸のあけて過ぎて過ぎにしかたは夢かうつよか

と有りけり。いとあはれにめでたかりけり。

しりー可り扱ふ

こと祈り外の
祈禱

神哥に「神前」
の祈るるべし

八幡の袈裟御子がさいはひののち、打ちつとき人に思はれて、大菩薩の御事をしりまゐらせざりければ、若宮の御崇にてひとり持ちたりけるむすめ大事に病みて、目のつぶれたりけるを、こと祈りをせず、むすめを若宮の御前に具して參りて、膝のうへに横ざまにかき伏せて、

奥山にしをるしをりは誰がため身をかきわけて生める子のため

といふ歌を、神哥に泣くく、あまたよび歌ひたりければ、頓て御前にて病やみ、目もさはさはとあきにけり。

讚岐三位俊盛と聞えし人、春日の月まうでをしけるに、定まりたる事にて、夜泊にまゐりて曉下向しけるに、夜深かりけるたび雨降りていと所せかりけるに、後生の事をかくほどに信を致して、佛にもつかうまつらば、いかばかりめでたかりなん、現世の事のみ思ひて、此宮にのみつかうまつることと思ひて、春日山を通りけるに、高き梢より、菩提の道も我山の道といふ御聲の聞えけるに、限りなく信おこりて、尊く覺えける。

いちのきれ
（柿のきれ）の衍
カ（柿一市一
ち）

長吏に法印一
本（長吏に法印）

安貞一後堀川天
皇の御世
七月一本「七
日」

比叡の山横河に住みける僧のもとに、小法師のありけるが、坊の前に柿の木もありけるを切りて焚かんとて、いちのきれを割りたりける中に、黒みのありけるが、文字に似たりけるを、怪しと思ひて坊主に見せたりければ、南無阿彌陀佛と云ふ文字にて有りける。不思議なども云ふばかりなくて、横河の長吏に法印といひける人に見せたりければ、上西門院をりふし御社に御こもり有りけるに、持て参りて御覽せさせければ、取らせ給ひて後白川院にまゐらせさせ給ひてけり。蓮花王院の寶藏に納まりけるを、我所にこそ置くべけれど、憤り申しけるとなん。

安貞のころ河内國に百姓ありけるが、子に蓮花王といひける童ありけり。七つなりける年死にけるが、念佛申して西に向ひて、かたはらなる人に、我死にたらば七月といはんにあけて見よと、言ひて死にけり。其後人の夢に必ずあけよといふと見てあけてければ、舍利に成りにけり。是を取りて人にをがまさんとて、かりそめに帳をして入れたりけるに、此帳を程なく蟲のくひたりけるを見ければ、

歸命蓮花王

大聖觀自在

廣度衆生界

父母善知識

とくひて、はての文字の所に蟲の死にてありける。いと不思議にめでたき事也。

鎌倉武士入道して、高野山の蓮花谷に行ふありけり。此者がぬる所にて、夜なく、女と物語をしける音のしければ、具したりける弟子ども、大方心得がたくて、便宜のありけるに、或弟子此入道に尋ねたりければ、さる事あり、吾女の鎌倉にありしが、夜なく

高野山一本山
の字なし
便宜ついで

空阿彌陀佛一僧
の名

是へ來るなり、それに何事もいひあはせ、又古里の事の覺束なさも語り、世間の事もはからひなどしてある也といひければ、弟子いふばかりなく不思議に覺えて、不思議の餘りに、空阿彌陀佛にありのまゝに申しければ、空阿彌陀佛うち案じて、さることも多くあり、此女のいたく戀しく思ふによりて、魂などの通ふにこそ、此定ならば臨終の妨にも成りなんす、急ぎ祈るべきぞとて祈られけり。或時に念佛にて祈りて見んとて、蓮花谷の聖三四十人ばかりめぐりて、此入道の中にするて、念佛をせめふせて申したるに、入道同じく申しけるが、空阿彌陀佛の祕藏の本尊の帳に入りたるがおはしましける、そ

少輔入道一寂蓮

のかたをつくく^くとまもりて、恐しけに思ひて、わな^くと震ひければ、空阿彌陀佛寄りて、など恐しけには思ひたるごと問へば、其御本尊の御前に、かの女房がまうで来て、我を世に恨しけに見て候ふが、などやらん餘りにおそろしくと申しければ、其時空阿彌陀佛、門々不同八萬四、爲滅無明果業因、利劍卽是彌陀號、一聲稱念罪皆除と、高く誦せられたりければ、此女の顔の中より二つにわれて散るやうに見えて失せにけり。是をば人は見ず、只入道ばかり見ていと恐しくて、つん^くとかみへ躍りたるが、其後はもとの心になりて行ひけり。念佛の力のたふとき事、いとど人々たふとび合ひけり。本體の女はつやつやすることなくて、元のやうに鎌倉にありけりとぞ聞えし。天魔のしわざか、又めの戀しと思ひけるが故にか、いと不思議なり。

少輔入道と聞えし歌よみ、ありまの社にまうでて、社の前なるものを見て、

此山のしよいかめしく見ゆるかないかなる神の廣前^{ひろまへ}ぞこは

とよめりける、いと興ありてこそ聞えけれ。ひんなきさまにてぞ聞ゆる。すべてかやう

このうち一箱の中、此内

藤が岡一蓬は受をいふ

我身いかにか云々
一伊勢物語、一殿
河なるとつ山の
邊のうつくしにも
源にも人に逢は
ぬなりけりこの
巻に本づく
うつくしに一生時
に
何人一本「何
の人」

の歌いみじく詠まれけるとかや。寄鳥述懐の歌に、

玉葉このうちも猶うらやまし山がらの身のほどかくす夕^{ゆふ}貌^{すがた}の宿

風の氣ありて灸治しけるに、人のとぶらひて侍りける返事に、

年へたる風のかよひぢたづねずは蓬が關をいかどすゑまし

此人うせて後、宇治なる僧の夢に、ありしよりことの外にほけたる様^{さま}にて、

我身いかにするがの山のうつよにも夢にも今はとふ人のなき

とながめてける、いとあはれなり。此歌のさまうつよに其人の好まれし姿なるこそ、ま

ことにあはれに侍りけれ。

或人の夢に其正體もなきもの、影のやうなるが見えけるを、あれは何人ぞと尋ねければ、紫式部也、そらごとをのみ多くしあつめて、人の心を惑はすゆゑに、地獄におちて苦を受くる事いと堪へがたし、源氏の物語の名を具して、なもあみだ佛といふ歌を、巻毎に人々によませて、わがくるしみを訪ひ給へといひければ、いかやうに詠むべきにかと尋ね

建久一後鳥羽帝の御世

我さへ云々一金葉上、家を人にはなちてたつとて柱に書きつけ侍りける、周防内侍、住みわびて我さへ軒の忍ぶ草しのぶかたがたしげき宿かな

けるに、

桐壺にまよはん間もはるばかりなもあみだ佛と常にいはなん
とぞいひける。

昔の周防内侍が家の、淺ましなから建久の比こゝろまで、冷泉堀川の西と北との隅に朽ち残りて有りけるを、行きて見ければ、

我さへ軒のしのぶ草

と柱にむかしの手にて書き付けたりしが有りける、いとあはれなりけり。是を見てある歌よみ書きつけける。

これやその昔の跡とおもふにも忍ぶあはれのたえぬ宿かな

近ごろ和歌の道殊にもてなされしかば、内裏、仙洞、攝政家、何れもとりふに底をきはめさせ給へり。臣下あまた數多聞えし中に、民部卿定家、宮内卿家隆とて、家の風かぜたゆることなく、其道に名を得たりし人々なりしかば、此二人にはいづれも及ばざりけるに、或

攝政殿一後京極良経
候よ一本なし

時攝政殿、宮内卿を召して、當時たどしき歌よみ多く聞ゆる中に、何れかすぐれ侍る、心に思はんやう有りのまよにと御尋ね有りければ、いづれともわきがたく候ふとばかり申して、思ふやう有りけなるを、いかにくとあながちに問はせ給ひければ、ふところよりたがひ疊紙をおとして、やがて出でにけり。御覽せられければ、

新勅撰秋上明けば又秋の半も過ぎぬべし傾く月のをしきのみかは

と書きたり。此歌は民部卿の歌也。かよる御尋ねあるべしとは、いかで知るべき。只もとより面白くおほえて、書き付けて持たれけるなめり。其後また民部卿を召して、さきのやうに尋ねらるよに、是も申しやりたるかたなくて、

新勅撰冬かさよぎの渡すやいづこ夕霜の雲井に白き峯のかけはし

と、たかやかになご咏めて出でぬ。是は宮内卿の歌なりけり。まめやかの上手の心は、されば一つなりけるにや。

後拾遺をえらばれける時、秦兼方といひける隨身、

えらぶ人一通俊
をさす

花こそ宿の拾
遺編、公任卿、
「春きてぞ人も
とひける山里は
花こそ宿のある
むなりけれ」

鳴たつ澤一新古
今秋上、西行法
師、心なき身に
もあはれはしち
れけり」

金菫春 去年みしに色もかはらず咲きにけり花こそ物は思はざりけれ

と云ふ歌をよみて、えらぶ人のもとに行きて、此歌入れんと望みけるに、花こそといへるが、犬の名に似たると難じけるを聞きて、立ちざまに此殿は勅撰などうかたまはるべき人にてはおはせざりけるものを、花こそ宿のあるじなりけれといふ歌もあるはと言ひかけてける、いとはしたなかりけり。

西行法師が陸奥のかたに修行しけるに、千載集えらばると聞きて、ゆかしさにわざと上りけるに、知れる人行きあひにけり。此集の事も尋ね聞きて、我よみたる、

鳴たつ澤の秋のゆふ暮

といふ歌や入りたると尋ねけるに、さもなしと言ひければ、さては上りて何にかはせんとして、やがて歸りにけり。

或人歌よみ集めて、三位大進と聞えし人のもとに行きて見せ合せけるに、侍るといふ事をよみたりけるを、歌の言葉にあらずと言ひければ、ふる歌にまさしく有りといひけり。

り。よもあらしものをと言ふに、いで引き出でて見せ奉らんとて、古今を開きて、

山がつかかきほにはへる青つどら

といふ歌を見せける、いとをかしかりけり。

下毛野武正といひける隨身の、關白殿の北の對のうしろを、誠にゆよしけにて通りけるに、局のさうし、あなゆよしはとふく秋とこそ思ひまゐらすれと言ひたりければ、ついで、北の對の女の童へに散々にのられたりつると言ひければ、いかやうにのられつるぞと問はれて、鳩吹く秋とこそ思へといふに、兼弘は兼方が孫にて、兼久が子なりければ、かやうの事心得たる者にて、口得しき事のたまひけるかな、府生殿を思ひかけて言ひけるにこそ、

み山出て鳩ふく秋の夕暮はしばしと人をいはぬばかりぞ

といふ歌の心なるべし、しばしとまり給へといひけるにこそ、無下に色なくいかにのり

山がつかかきほにはへる青つどら
のちれ一罵られ
ついでふされ一不
詳
さうし一體仕な
るべし

給ひけるぞと言ひければ、いでくさては色直して参らんとて、ありつる局のしも口に行きて、物承らん、武正鳩たけまさふく秋ぞ、ようくと言ひ立てりける、いとをかしかりけり。

鳥羽院の御時、花の盛さかに法勝寺へ御幸ならんとしけるに、執行しんぎやうなりける人見てとて参りけるに、庭のうへに所もなく花散り布きたりけるを、淺ましき事なり、只今御幸のならんするに、今まで庭を掃かせざりけると、叱り腹立て、公文の従儀師を召して、今までいかに掃除さうじをばせざりけるぞ、不思議なりといひければ、ついひざまづきて、

散るもうし散りしく庭もはかまうし花に物おもふ春の殿守とのもり

と申して、こや御房かはき侍らぬになど言ひければ、はよかつひとひて猶叱りけり。

承久の頃住吉へ然るべき人の参らせ給ひけるに、折ふし神主經國京へ出たりけるが、人を走らせて、住の江殿など掃除せさせよと言ひやりたりけるに、餘りのきらめきに、年とし比然ひぜんるべき人々の書きおかれたる歌ども、柱はしら、長押ながおし、妻戸つまどにありけるを皆削り捨ててけり。神主下りて是を見て、こはいかにせんと、足ずりをして悲めども甲斐なかりけり。

はよかつひと
承久一願徳天皇
の御世
餘りのきらめき
に―消聲にし
ぎて
足ずりぢだん
だよむこと

是を見てふるき尼の書き付けける。

世の中のうつりにければ住吉の昔の跡もとまらざりけり

是は承久の亂ののち、世の中あらたまりける時のこと也。

松島の上人といふ人有りけり。修行者のあはんとて行きたりけるに、幽立なる僧の出逢ひたりければ、いと思はずに覺えて、歸り入りたりける跡に、又ありける僧にあれば、誰にておはしますにかと尋ねければ、あれこそ聖ひじりの御房よといひけるに、たふとけになんとやおはしますらんとこそ思ひつれと言ふを、ひじり物ごしに聞きてよめる歌、

紫の雲まつ嶋にすめばこそ空ひじりとも人のいふらめ

とよめりけり。此ひじりのもとへ肥後の右衛門入道といひけるもの行きて、かくておはします程何事か候ふと尋ねければ、させる事も侍らず、法花經などおほえ奉りて、寝たるをりく、此嶋の松の葉毎に、金色の光の見えるかどやく事などぞ侍ると言はれける。いとめでたかりけり。

文學一文學に同

文學上人佐渡國に流されたりけるが、召し歸されたりけるに、あるやんごとなき歌よみのもとより、

嬉しき一嬉しさの行か

わかれしを悲しと聞きし老の身の今までありし嬉しきはいかにと有りければ、かへし、

嬉しさも宮こに出しそはいかに今はかへりてかゝるおひせを

嬉しさも云々一此歌解し難し、第二句は「都に出でし」にて「おひせ」は老漢か

此上人の歌に、

世の中に地頭ぬす人なかりせば人の心はのどけからまし

とよみて、我身は業平にはまさりたり、春の心はのどけからましといへる、何條春に心のあるべきぞといひけり。

小侍従が子に法橋實賢と云ふもの有りけり。いかなりける事にか、世の人は是をひきがへるといふ名をつけたりける。法眼を望み申して、

法の橋のしたに年ふるひきがへる今ひとあがり飛びあがらばや

法の橋一法橋は法眼より下位を

と申したりければ、やがてなされにけり。

弘誓房といふ説經師、人の物をかりて多く成りてのち、還しやるとて其文のうちに書き付けける。

夜やさむき衣やうすきかるぜにの日に比を経てはあとつかひつゝ

然るべき所に佛供養しけるに、堂のかざりより初めて、えもいはぬ聽聞の局の几帳の中に空炷の香みちていみじかりけるに、聽聞の人の多くあつまりて、耳を澄ましたるに、内よりおびたどしく大きな屁の音出できにけり。皆人興さめて侍るに、導師とりもあへず、放逸邪見の里にはついくわをもをしむ、聽聞隨喜の局よりおほへをこそうち出されたれと言ひたりける。淺ましくもをかしくも有りけり。

或説經師の請用して殊にめでたくたふとく説法せんとしけるに、はこのしたかりければ、事いそがしくなりて、よろづ急ぎて布施も取らず歸りて、物ぬぎちらして急ぎ極殿へ行きたりけるに、屁ばかりひりて、又物もなかりけり。かゝるべしと知りたらば、高座の

はこ一大便

いそがしく一

本一いそがはしく

すかしてん—放
 屁せん
 すかされて—欺
 かれて
 いふけつ—一本
 「いふよつ」
 板風呂—蒸風呂
 の事をいふなる
 べし
 ひさぎて—ふさ
 ぎての眼なるべ
 し
 目をゆひて—目
 を布にてくくり
 て
 かへたる所—
 包みかくしたる
 所

上にてもしばしこらへて、説經をもすべかりけるものと、悔しく思ひてける程に、其次の日又人に呼ばれて説經しける程に、又はこのしたかりけるを、すかしてんと思ひて少し居なほるやうにしければ、まことの物おほく出にけり。此僧すべき方なくて、昨日はここにすかされて屁をつかまつる、今日は屁にすかされてはこをつかまつると言ひて、走りおりて逃げ出にければ、うへの袴より垂り落ちて、堂の中きたなく成りにけり。聽聞の人鼻をおさへて興さめてけり。いとをかしかりけり。

念佛者の中につちゆいふけつと云ふ僧有りけり。或所に板風呂と云ふ物をして、人々入りけるに、此僧目をやむ由いひければ、目をひさぎて入るは苦しかるまじき由を人々いひければ、さらばとて、目をゆひて板風呂の有様も知らぬものの、目は見えざりければ、風呂の前にわき戸のうちありけるに、風呂と心得て、裸にてかへたる所もうちとけてるにけり。人々女房など見おこせたるに、裸なる法師のかくし所も打出して、あなぬるの風呂や、たけくと言ひてるたりける、いとをかしかりけり。人々笑ひける聲を聞

人々をかしく—
 一本—人々をか
 しくも—

きて、あやしく思ひて目をあけて見れば、風呂にてもなき所にゐて、人々笑ひける時に、淺ましく覺えて走り逃けにけり。人々をかしく思ひあへりけり。

右今物語一帖者右京權大夫信實朝臣之抄也信實者爲經入道寂超之孫右京大夫隆信朝臣之子少將內侍辨內侍等之父於歌並畫而堪能也此書借洛東岡崎隱士村井古巖之藏書寫且以橫田茂悟屋代詮賢本再三遂校合聊注愚案今爲鏤梓請詮賢清書畢

天明六年丙午二月廿五日

檢校保 己 一

東齋隨筆

東齋隨筆

音樂類

玄上一琵琶の名 村上聖主、明月の夜清涼殿の晝ひの御座ござにして、玄上を水牛の角の撥にて弾きすまして、たゞ一所御座有りけるに、影のごとくなるもの空より飛びて参りたり。まこひつし孫庇まこひつしに居ければ、彼は何物ぞと問はしめ給ふ所に申して云ふ、大唐の琵琶の博士廉承武例大郎に候ふ、唯今虚を罷り通る事候ひつるに、御琵琶の撥音のいみじさに参入する所也、恐らくば昔貞敏に授け残したる曲の候ふを授け奉らんと申す。聖主歡感の氣色有りて、御琵琶をさしやらしめ給ひたりければ、撥鳴らして、これは廉承武が琵琶に候ふ、貞敏に二つ給たひ候ふ内にて候ふと申しけり。終夜御物語有りて、上玄、石上の曲をば授け奉れり。承和遣唐使掃部頭貞敏をば、妙音院入道相國はつねに吾祖師守官令と仰せられけり。玄

申して云ふ一原
本「申云」とあり

無爲一無事
相轉一相傳の衍
か

上の事を江中納言に人の問はれければ、慥なる説をばしらず、延喜のころ玄上の宰相といひたる琵琶引の琵琶やらんとぞ答へられける。平等院の寶藏に水龍と云ふ笛あり、唐土の笛也。唐人此朝に渡る時、海中に船沈まんとす、舟人等種々の財物を海に入れしむるに、皆以て沈まず、仍て件の笛を入るよとき即ち沈み、船無爲に著岸せり。後に本主砂金千兩を儲けて龍王に相轉せんと思ひて、金を沈めんとする時、件の笛忽ちに浮び出たり、よて金に替へて取り返せる笛也。宇治殿此事を聞召して、件の笛を買ひ取り給ひて、寶藏に縮められけり。

慈覺大師音聲不足にまします間、尺八をもて引聲の阿彌陀經を吹傳せしめ給ふが、成就如是功德莊嚴と云ふ所を得吹かせ給はざり、常行堂の辰巳の相扉にて吹きあつかはせ給ひたりけるに、空中に音有りて告げて云ふ、やの音を加へよと、これより如是やと云ふやの音は加ふる也。

あさて一明後日

放鷹樂と云ふ樂をば、明暹已講只一人習ひ傳へたりけり。白河院、熊野行幸あさてと云

おろく一ひと
とほり

ひける夜、山階寺の三面僧坊にありけるが、今夜は戸なさしそ、尋人あらんとぞ云ひける。待ちける所に案のごとく入り来る人あり。これを問へば是季也。放鷹樂習ひにかと云ひければ、然也と云ふ。別房の内へ入れて件の樂を授けけり。

堀河院の御時、南都の僧徒を召して大般若の御讀經を行はれけるに、明暹此中に有りて、其時主上御笛を遊ばしけるが、様々調子を替へて吹かしめ給ひけるに、明暹調子ごとに聲をたがへず經を揚げければ、主上あやしませ給ひて、此僧を召しければ、明暹庭上に跪き候す。勅によて寶子すのこに候す。笛や吹くと問ひ給ひければ、おろく一吹き候ふと申すに、さればこそとて、御笛を給ひて吹かせらるよに、萬歳樂をえもいはず吹きたりければ、歡感有りてやがて其御笛を賜ひけり。般若丸と名を付けて持ちたりけり。傳々して今八幡の別當幸濟がもとに有りとなん。

敦實親王一宇多
天皇の皇子
住めり一一本
「みたり」
調一一本「曲」

逢坂の蟬丸は式部卿敦實親王の雜色也。盲目と成りて琵琶を引きけるが、逢坂の邊に庵を結びて住めり。博雅の三位延喜御孫克明親王子源氏也是に流泉啄木の調をつたへたり。敦實親王管絃の

箏の生の一調
あるにや

道に達し給へり。蟬丸が琵琶は是を聞き取りて弾きける也。それよりして盲目の琵琶引くことは始めり。
博雅三位の箏譜の奥書に云ふ、古樂萬歲樂自序始て六帖に畢る迄無不落涙、予誓世々生々在々所々箏の生の彈萬秋樂也、身凡調の中には盤涉調殊勝、樂の中には萬秋樂神妙也、博雅は此調子竝に此樂を好むによて、都率外院に生ずるよし經信卿記に見えたり。

博雅三位月のあかよりける夜、直衣にて朱雀門の前に遊びて、終夜笛を吹きけるに、同じさまに直衣著たる男の、笛を吹くありければ、誰ならんと思ふほどに、其笛の音此世にたぐひなくめでたく聞えければ、あやしくて近く寄りて見ければ、いまだ見ぬ人也。我も物をいはず、彼もとふ事なし。かくのごとく月の夜ごとに行き合ひて、吹くこと夜頃に成りにけり。彼の人の笛の音殊にめでたかりければ、試みにかれを取りかへて吹きけるに、世になき程の笛也。其後猶々月の頃になれば、行き合ひて吹きけれど、本の笛

御堂入道一遺長
宇治殿一頼通
富家入道一忠實

を返し取らんとも言はざりければ、やがて永くかへてやみにけり。三位うせて後、御門此笛を召して、時々笛吹どもに吹かせらるれども、其聲を吹きあらはす人なかりけり。其後淨藏と云ふめでたき笛吹ありけり、召して吹かせらるよに、三位に劣らざりければ、御門感じ給ひて、此笛の主朱雀門のほどにて得たりけるとこそ聞け、淨藏彼所に行きて吹けと仰せられければ、月の夜仰せの如く、かしこに行きて此笛を吹きけるに、彼の門の樓の上に高く大きな聲にて、猶逸物かなと褒めてけるを、かくと奏しければ、始めて鬼の笛と知食してけり。葉二つと名付けて天下第一の笛也。其後傳へて御堂入道殿御物になりけるを、宇治殿平等院をつくらせ給ひける時、御經藏に納められけり。此笛には葉二つあり、一つは赤く、一つは青し、朝ごとに露おくと云ひ傳へたれば、京極殿御覽じける時は、あか葉落ちて露おかざりけりと、富家入道殿かたらせ給ひけるとぞ。笛には皇帝、團亂、旋師子、荒序是を四つの祕曲と云ふ。それに劣らず秘するは、萬秋樂の五六帖也。笛の寶物には青葉二、大水龍、小水龍、頭燒、雲太丸是なり。名によて各

由緒ありとかや。宇治殿葉ふたつと云ふ笛を傳へ持たれたりと聞召して、内より或藏人をして彼の笛を召しけるに、御使はふたつ召しあるとばかりを申して、笛といふ事を申さざりければ、老後には二つめさんこと、術なきよし御返事に奏せられける。一の不思議也と云へり。

承香殿女御藤子女王式部卿
重明親王一女と申しよは、齋宮女御よ。御門久しくわたらせ給はざりける秋の

夕暮に、琴をめでたく引き給ひければ、急ぎ渡らせ給ひて、御側におはしましけれど、人やあるとも思したらで、せめて引き給ふをきこし召せば、秋の日のあやしき程の夕暮に、萩吹く風の音に聞ゆると、引きたりし程こそせちなりしかと、御集に侍るこそいみじう候へ。

東三條院の御賀に、此關白殿賴通陵王、春宮大夫殿賴宗納蘇利まはせ給へりしめでたさはいかにぞ。陵王はいと氣高くあてに舞はせ給ひて、御祿給はらせ給ひて、舞ひ捨てて知らぬさまにて入らせ給ひぬる、うつくしさめでたさに、並ぶ人あらじと見まるるるに、

あてに—高雅に

目馴れ—目馴れて珍しからぬこと
給はせ侍る—原本—給はせ侍とあり、給はせ給ふの誤か

納蘇利のいと賢く、一人かくこそ有りけめと見えて舞はせ給ふに、御祿を是はいとしたよかに御肩に引掛けて、今一かへりえもいはす舞はせ給へりし興は、又かよるべかりけるわざ哉とこそ覺え侍りしか。御師の陵王は必ず御祿は捨てさせ給ひてんぞ、同じさまにせさせ給はん、目馴れなるべければ、さま替へさせ奉りたるなりけり。心ばせ勝ればとこそいはれ侍りしか。女院かうぶり給はせ侍る、大夫殿をばいみじくかなしがり申させ給へばこそ、龍王の御師はたまはらで、最いからかりけり。それにこそ北の政所少しむつがらせ給ひけれ。さて後にこそ給はすめりしか。かたのやうに舞はせ給ふとも、あしかるべき御歳の程にもおはしませず、わろしと人の申すべきにも侍らざりしに、實にこそ二所ながら、此世の人とはおほえさせ給はで、天童などのおり來るとこそ見えさせ給ひしか。

草木類

南殿の櫻は本是梅の木也、桓武天皇遷都のとき植ゑらるる所也。仁明天皇承和年中に枯

天曆一村上天皇
の御世

れ失せたるによて、櫻の木を改めうゑらる。其後天徳四年九月二十三日内裏焼亡にて造内裏の時、式部卿重明親王の家の櫻を移し植ゑらる。件の木はもと吉野山の櫻なりと云へり。橘の樹は本より、遷都以前は此地橘大夫が家の跡にて有りとなん。

實方中將奥州に下向ののち、歌枕を見んために、毎日國の中を經廻せしに、或日あこやの松みに出んと思ひ給ふ所に、國人申しけるは、あこやの松と申す所は國中に候はずと申しければ、中將、などや無かるべきとの給ひける時、老翁一人進み出て申して云ふ君はもし陸奥のあこやの松に木がくれて出づべき月の出でやらぬかとよめる古歌を、思召して仰せられ候ふか、その歌は陸奥の國をいまだ出羽の國に割き出されぬ時によめる歌也、兩國に分たれて後は、彼松は出羽の國の中にまかり成りて候ふと申しけり。亦奥州に菖蒲なきによて、水草は同じ事とて、五月五日にかつみを齋かれけり。そののち國の習ひとなりて、かつみを齋くといへり。

かつみ—菖蒲の
古名

二條三位平經盛の家に梅花めでたく咲きける時、源三位頼政その前を通るとて、車をと

いひつぎ—取次

思ひのほか云
云—拾遺—平
兼盛—我宿の梅
の立ち枝か見え
つらん思ひの外
に君がきませ
るし

どめて、思ひの外に参りて侍りといひ入れたりけるを、いひつぎの侍、源三位殿申すと侍り、思はざるほかにこそ参りて侍れと聞えければ、心得ぬやうに思はれながら、對面してかへされにけり。後に事の次にこの事語りいでて、かたみにをかしき事にいはれけり。此侍思ひのほか君がきませるといふ古歌を知らざりけるにや。心得ぬものは物まねに答の出でくるなり。

一條院の御時、臨時祭の試樂實方中將遅参して、挿頭の花を賜はず。追つて舞に加はる時、竹臺のもとに進みよりて吳竹の枝を折りて、これを挿す、優美の由、人みな感歎す。これによて試樂のかざしには、ながく吳竹の枝を用ふと云へり。

天曆の御時に清涼殿の御前の梅の木枯れたりしかば、求めさせ給ひしに、なにがしの主の藏人にていますがりし時、承りてひと京まかりありきしかども侍らざりしに、西の京のそこくなる家に色こく咲きたる木の、容體うつくしく侍りしを掘り取りしかば、家のあるじの、木に是ゆひ付けてもてまるれと言はせ給ひしかば、あるやうこそはとて、もて

天曆—村上天皇
の御世
ひと京—京中

参りて候ふを、何ぞと御覽じければ、女の手にて書きて侍りける。

勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はどいかどこたへん

と有りける。あやしく思召して、何もの家ぞと尋ねさせ給ひければ、貫之のみ娘の住所なりけり。口惜しきわざをもしたりける哉とて、あまえおはしましける。

拾遺集に云ふ、此歌をまづ奏せしめければ、搦らす成りにけり。

衆樹もろきの宰相五十までさせる事なく、おほやけに捨てられたるやうにていますがりけるに、八幡に参りたるに雨いみじう降る、石清水いししみづの坂登りわづらひつゝ参り給へるに、御前の橘の木すこし枯れて侍りけるに立ちよりて、

千早振る神の御前の橘ももろきもともに老いにけるかな

とよみ給へば、神もあはれみさせ給ひて、橘も榮え宰相も思ひかけず頭に成り給へるとぞ。

内大臣鎌足藤原の姓を賜はり給ふ時、紀氏の人のいひけるは、藤の掛けぬる木は枯れぬ

あまえ一きまり
わるく耽づる意

衆樹一良岑安世
の子

早一人頭

見き一三木

よめる一詠むと
歌ふる意とにか

御堂關白一道長

るもの也、今ぞ紀の氏は失せなんずるとぞの給ひける。誠にこそしか侍れ。

橘季通と云ふ人、則光朝臣のもとに陸奥國に下りて、竹隈の松をよみ侍りける。

たけくまの松は二木を都人いかにと問はど見きとこたへん

僧正源覺、季通が歌を聞きてよみ侍り。

竹隈の松は二木を見きといはどよくよめるにはあらぬなるべし

鳥獸類

御堂關白殿法成寺をつくらせ給ふとき、日ごとに渡らせおはします。其頃白犬を愛して飼はせ給ひける、御堂へも毎日御供に参りけり。或日門を入らせおはしましけるに、御前にすよみて、走りめぐりて吠えければ、立ちとまりて御覽するに、させる事なかりければ、猶歩び入らせ給ふに、犬御直衣の欄をくひて引きとどめたてまつれば、いかにも様あるべしとて、欄かざりを召して御尻を掛けてる給ひて、安倍晴明朝臣を召して、子細を仰

紙ひねりこよ

せらるゝ時、晴明しばらく眠りて思惟したる氣色にて申す様、君を咒詛したてまつる者、厭物を道に埋めて越えさせ奉らんとかまへて侍る也、今御運やんごとなくて、御犬ほえあらはす所也、もとより犬は小神通のものなりとて、其所をさして掘らするに、土器を打合せて黄なる紙ひねりをもて、十文字にからけたるを掘り出せり。晴明申して云ふ、この術はきはめたる祕事也、晴明が外知りたる者なし、但道満法師が所爲歟、其人を知るべしとて、ふところ紙を取出でて、鳥の形を折りて、咒を唱へて打ち上ぐるところに、白鷺となりて、南をさして飛び行く。この鳥の落ちとまらん所を、厭術の者の住所と知るべしと申しければ、則ち下部をもて彼の鳥の飛び行く方をまもりて行かせしむる間、六條坊門萬里小路河原院のほとり、ふるきもろ折戸の中に落ちとまりぬ。すなはち探り尋ぬるに、老僧一人あり。是をからめ取りてかへり参る。子細を問はるゝに、道満堀河左府のかたらひを得て、術を施すよし白狀す。然れども罪をばおこなはれず、本國播磨へ追ひ下さる。但永くかくのごときの術を致すべからざる由、誓狀を召さる。これ運の強

く慮りのかしこくましますによりて、かゝる難をのがれさせ給へり。

大納言行成卿いまだ殿上人にておはしける時、實方中將いかなるいきどほりか有りけん、殿上に参りあひて、言ふことなくて、行成の冠を打ちおとして、小庭に投げすててけり。行成騒がずして、主殿司を召して、其冠を取りあけさせて著して、何程の過意によりて、これほどの亂罰にあづかるにや、其故をうけたまはらんと云ひければ、實方一言をのべずして立ちにけり。折しも主上小部こしやまより御覽じて、實方は嗚呼なげの者なりとて、中將を召して、歌枕見て参れとて、陸奥守になして流し遣はされければ、終にかしこにて失せにけり。實方藏人頭にならずして止みにけるを恨みて、其執心雀と成りて、殿上の小臺盤たいばんにゐて、臺盤をつまきけるとなん申し傳へたり。

延喜聖主御衣の上に蠅の一つ居たりけるを御覽じて、仰せられて云ふ、世こそ無下に陵遅りんぢしにけれ、我運も亦末に成りにけり、かくはなかりしものをとなん。

六條の南室町の東一町は、祭主三位輔親が家なりけり。丹後の天橋立をまねびて、池の

申し傳へたり
「たり」は「たる」
の衍のりなるべし
延喜聖主一醜聞
天皇
陵遅一衰し營

音み居たり一環
備し居たり

ござりつかい
「ござりつるか」
の行なるよし

中島をはるかにさし出て、小松をながく植ゑなどしたりけり。春の初めに軒近き梅の枝に鶯の止りて、巳の時ばかりに来て鳴きけるを、ありがたく思ひて、これを愛するよりほかの事なかりけり。時の歌よみどもに、かゝる事こそ侍れと告げめぐらして、明日の辰の時にわたりて聞かせ給へとふれまはして、伊勢武者の宿直するが^{まの}ありけるに、かゝる事あるぞ、人々わたりて聞かんするに、あなかしこ、鶯こちなくしてやるなど言ひければ、この男なじかはつかはし候はんと云ふ。輔親とく夜の明けよかしと待ち明して、いつしかとく起きて、寢殿の南面とりしつらひて音み居たり。辰の終ばかり、時の歌よみ共あつまり來りて、今や鶯鳴くとうめき合ひたるに、さきくは巳の時ばかりに必ず來鳴くが、午の時さがりて見えねば、いかならんと思ひて、此男をよびて、いかに鶯のいまだ見えぬは、今朝はござりつかと問へば、鶯のやつはさきくよりも疾く参りて侍りつるが、かへりけに候ひつるあひだ、召しとどめて候ふといふ。召しとどむとはいかにと問へば、取りて参らんとて立ちぬ。心得ぬ事かなと思ふほどに、木の枝に鶯を結び付け

じんどう一神頭
又は鐵頭と音
く、鐵の一種
脇をかいとりて
胸をかゝりて
袴り顔なるをい
ふ
いきまへーいき
むこと

高野天皇一孝
天皇

はうけう一奉行
か

て持て來れり、大方あさましとも云ふばかりなし。こはいかにかくはしつるぞと問へば、きのふ仰せに鶯やるなと候ひしかば、いふかひなく逃がし候ひなんは、弓矢とる身に心うく覚え候ひて、じんどうをはけて射おとして侍りと申しければ、輔親もるあつまれる人も、淺ましと思ひて、此男が顔を見れば、脇をかいとりて、いきまへて跪きたり。祭主とく立ちねといひけり。人々をかしさ言ふばかりなけれども、男の氣色に恐れてえ笑はず、ひとり立ち、ふたりして、皆かへりにけり。興さむなんどは事もおろかなり。

人事類

高野天皇崩遺詔に云ふ、大納言白壁王を以て皇太子とすべし、然るを右大臣吉備朝臣眞備は天武天皇の御孫長親王の子從二位文室淨三真人を立てて太子とせんとす、左大臣藤原永手、左中辨藤原百川等は、なほ白壁王を立てんとす、異論まぢく也。但淨三真人は固辭し給ふ、よて吉備公は其弟參議太市真人を立てんとす。この人はうけうし給ふ策

命の日に及びて、百川はかりごとごとに僞りて宣命をつくりて、百官の前に讀ましむ。其文に白壁王は諸王の中年齒長ぜり、亦先帝に功あり、故に太子に定むる由披露す。吉備公大に驚きて舌を巻き、いかんとする事なし。光仁天皇の位につき給ふは、參議百川が功といひ傳へたり。

顯基中納言は後一條院の寵臣也。天皇長元九年四月十七日崩、御年二十九。顯基忠臣は二君に仕へすと云ひて、七々の聖忌の後、天台山楞嚴院にのほりて、つひに出家す。發心の根元は天皇晏駕の後、故宮に灯を供する人なし、子細を問へば、所司は皆新主の事勤仕すと云ふ。此事を聞きてたちまちに發心す。尋常のとき、白樂天の詩、古墓何世人不知姓與名、化爲道傍土、年々春草生と、此詩を詠じ侍り。又あはれ罪無くして配所の月を見ばやとの給へり。大原山に住して往生せり。法名圓昭。宇治殿大原にのほり給ひて、庵室をとぶらはせ給ひて、終夜御物語有りしに、今生の事をば一言申し出されざりけり。宇治殿後世をば必ず引導し給へと示し給ひて、曉更に歸り給ひけるとなん。

晏駕一崩去

○此語十訓抄に
いづ
野相公一いづ小野重

嵯峨帝の御時、無惡善とかける落書有りけり。野相公に見せらるゝに、さがなくてよけんいづと讀めり。惡はさがとよむゆゑ也。御門御氣色あしくて、扱は臣が所爲かと仰せられければ、かやうの御疑ひ侍らんには、智臣朝に進みがたくやと申しければ、一伏三仰不來人待書暗雨降戀簡寢とかよせ給ひて、是を讀めとて給はせけり。

月夜には來ぬ人またるかきくもり雨も降らなん戀ひつよもねんと讀めりければ、御氣色直りにけりとなん。落しぶみは讀む所に咎とがありと云ふ事は、これより始まるとかや。わらべのうつむきさいと云ふ物、一つふして三つあふけるを月夜といふ也。此歌は古今集に讀人不知の歌也。

近頃鴨社の氏人にて、菊大夫長明といふ者ありけり。和歌管絃の道にて、人に知られたりけり。社司をのぞみけるが叶はざりければ、世を怨みて出家して大原山に住みけり。其後日野の外山と云ふ所にありて、方丈記とて假名にて書きたる物あり。出家の後本の如く和歌所の寄人にて候ふべきよしを、後鳥羽院より仰せられければ、

しづみにし今さら和歌の浦浪によせばやよらん海士の捨舟
と申して、つひにこもり居てやみにけり。

天曆の御宇橋直幹が民部大輔を望み申しける申文をば、みづから書きて小野道風に清書
せさせけり。主上御覽せられけるに、依人而事異、雖似偏頗、代天而授官、誠懸運命
など、述懐の詞書きすぐせるによて、御氣色あしかりけり。人はを恐れ思ふところに、其
後内裏焼亡有りて、俄に中院へ行幸せさせ給ひたるに、代々傳はりたる御倚子、時簡立
象、鈴鹿、以下もてまゐりたるを御覽有りて、直幹が申文は取り出したりやと、御尋ね
有りける時、人いみじき事にぞ申しける。

忠義公の御子閑院大將朝光と申すは、いみじかりし御世の覺えにて、まじらひの程事の
外にきらを好み給ひて、平胡籙の水精の筥、冠の透額も、此殿の思ひより給へるなり。
なにがしの行幸につかうまつり給へりしに、此胡籙負ひ給へりしかば、朝日の光にかど
やき合ひて、さるめでたき事やは有りし。今は目馴れたれば珍しからず、人も思ひて侍

忠義公—覺運

きら—事美
水精—水晶

さやかならぬ—
不分明

とりはなち云々
—取りはづしの
出来るやうにな
りたり
打ち付けられ—
釘付にすること

り。

伏見の修理のかみ俊綱と聞えしは、宇治關白殿の御子と申し侍れども、さやかならぬ事
なれば、讃岐守橋の俊遠が子に定まりて、橋の姓を名乗りしが、其後なほ殿の御子にて、
藤原の姓にかへり侍りて、直衣など許され侍りけるにや。

近江守有清といひし人は、後三條院のまことは御子と聞えしかども、讃岐守顯綱の子に
てやみにき。各母のふるまひ故に、あなた此方とまぎれたる事昔よりありしなり。

御座の覆掛くる筥はもと取りはなちに侍りけるを、鳥羽院の御位の時にや、殿上人のい
さかひ侍りて、其筥を抜きて打たんとしたりしより、打ち付けられたりとなんいへる。

詩歌類

後三條院住吉社に御幸有りける時、經信卿序代を奉られけり、其歌に云ふ、

おきつ風吹きにけらしな住吉の松の下枝をあらふ白浪

任大臣の大饗
大臣に任ぜられ
たる時の饗座

臨足一臨息に同
じ

當座の秀歌なりけり。帥卿後に俊頼朝臣をよびて言はれけるは、古今集に入る躬恒が歌に、

すみよしの松を秋風吹くからに聲打ち添ふるおきつ白波

此歌は任大臣の大饗せん日、所詠のおきつ風の歌、中門の中に入りて、史生の饗につきなんやと、俊頼も此仰せ如何、彼の御歌またく劣るべからず、然れども古今の歌たるによりて限り有りて、まづ任大臣候はんに、御作は一の大納言にて、尊者として南階よりねり上りて、對座にゐなんとこそ存じ候へと云ふ。帥卿さらばさも有りなんや、如何あるべきとて感氣ありけり。又自歎して云ふ、躬恒家集に歌ある中にも、彼の松を秋風のため品は、年閑けたる胡人の錦の帽子したるが、尺八琵琶を鳴らし、紫檀の脇足おさへて、詩を講じうそぶき眺望したる姿也。此人にむかひて争ひつべきは、我沖つ風の歌こそあれといはれけり。

都良香竹生島に詣でたりけるに、眺望の心澄みて、

三千世界眼前盡

と云ふ句を作りて、其末を案じ得ざりければ、靈天詫宣を下して、

十二因縁心裏空

と、一句をくはへ給へりけり。

同じ人羅城門の前を過ぐとて、氣霽風梳新柳髪と詠じたりければ、樓の上に聲ありて氷消波洗舊苔鬚と付けたりけり。良香菅丞相の御前にて、此詠を自歎し申しければ下の句は鬼の詞なりけりと仰せられける。

能宣入道伊豫守實綱にともなひて、彼の國に下りけるに、夏の初め日久しく照りて、民の歎き淺からざるに、神は和歌にめで給ふ物也、こころみに詠みて三島に奉るべき由、國司頻にすよめければ、

天の河なはしろ水にせきくだせ天くだります神ならば神

とよめるを、み幣に書いて、社司人申し上げたりければ、炎旱の天俄に曇りて、大なる

能宣一能因の眼
か

待賢門院—公實
卿の女

雨降りて枯れたる稻葉押並べて縁に歸りにけり。
待賢門院の女房に加賀と云ふ歌よみ有りけり。

かねてより思ひしことぞ伏柴のこるばかりなる歎きせんとは

と云ふ歌を、年頃詠みて持たりけるを、同じくはさるべき人にいひむつびて、忘れたらんによみたらば、集などに入りたらんおもても優なるべしと思ひて、如何したりけん、花園おとど申しそめてけり。思ひの如くにや有りけん、此歌をまるらせければ、おとどいみじく哀におほしけり。世人伏柴の加賀とぞ云ひける。さてかひなくしく千載集に入り
にけり。

和泉式部—大江
雅敏の女

和泉式部男のかれなくに成りける頃、貴布根に詣でたるに、螢の飛ぶを見て、

物おもへば澤の螢も我身よりあくがれにける魂かとぞ見る

と詠じてければ、御社の中に忍びたる聲にて、かく聞えけり。

奥山にたぎりて落つる瀧つ瀬の玉ちるばかり物なおもひそ

先後中書王—醍醐天皇の皇子兼明親王を前中書王、村上天皇の皇子具平親王を後中書王と稱す、中書は中務卿の唐名也

延久—後三條天皇の御世

賞首—藏人頭

そのしるし有りけりとぞ。

齊名、以言等を試みられける時、秋未出詩境と云ふ事を作らせられけるに、以言の詩文峯按、響駒過景、詞海鱗船葉落聲と作りたりける。ひそかに先後中書王に見せ奉る所に、白字大切也と仰せらるゝに付て、白駒景、紅葉聲と直して秀句に定りにけり。其後以言病おもかりける時、みこと訪ひ給ひければ、恩問之旨恐千廻白字事不忘却とぞ申しける。

政道類

延久の善政には先づ器物を作られけり。資仲卿藏人頭にてこれを奉行せり。升を召しよせてとりく御覽じて、簾を折りて寸法などさゝせ給ひけり。米をば穀倉院がり召しよせて、殿上の小庭にて賞首以下藏人出納など檢知して、小舍人玉だすきして量りけり。本米をば紙尾紙に巻みて持て参りたりければ、數覽有りて勅封を加へられてぞ、御持僧の許などへつかはされける。斛器は方なる櫃を差す、石をくより下けて、おもしにして、

二またの木に懸けて、穀倉院にして國々の米をば納められけり。仍て何石とは石字を用ふる也。件の器石等子、今穀倉院にありといへり。
 延喜の御門常にゑみておはしましける。此故はまめだちたる人には物いひにくし、打ち解けたるけしきにつきてなん、人は物いひよき。されば大小事きかためなりとぞ仰せ事ありける。

佛法類

大織冠の家は山城國宇治郡山科村陶原すませにあり。大臣久しく身病ある時に、百濟の尼法明と云ふ人あり、病をいやすべき法を問ひ給ふ時、維摩經を供養し給はど病平愈すべしといふ。これにて大臣の家の中に堂を立てて維摩經を講ぜしむ。問疾品を講ぜるとき、大臣の病すなはち愈えたり。是より毎年此經を講ぜしむ。淡海公の世に至りて、陶原の家やまの堂を移して奈良の京に立つ。これにて興福寺をば山階寺とも名づけ、亦藤原寺と

淡海公一不比等

も號せる也。長岡大臣内膳大願を發して、不空罽索觀音像竝に四天王像を造立す。閑院贈太政大臣冬嗣公弘仁四年に南圓堂を立てて、觀音像を安置し給へり。法花會は長岡大臣の御佛事也。十月十六日の忌日を結願にあてて、七ケ日行はると也。備前國鹿田庄を其料所とせり。

天平—聖武天皇の御世

大安寺は天平元年道慈律師、先皇の遺詔にて造立す。大唐の西明寺の結構を移して、道慈歸朝して作れり。西明寺は祇園精舎を摸して作る。祇園精舎は兜率の内院を移せりと云へり。大安寺本の名は大官大寺といへり。大和國添上郡平城右京五六條三坊にあり。

天王—原本のま
足ぬめし—たんにべし

孝謙天王法花寺を建立し給ふ時、塔婆におきては八角七重につくらんと思ひ給ふよし、左大臣永手に仰せ合せらるゝ時、永手云ふ、四角五重は足ぬめし、八角七重に造られば、さだめて國土の費たらんかと申す。是にて四角五重に造らる。大臣は國の公平を思ひて申すといへども、後生の責となりて、銅の火の柱を抱くといへり。其後永手の息男從四位上藤原家依病患の時、名徳の僧を請じて數日加持せしむ。或日傍人俄に詫宣して云

雅意一素意

進士の間一在衛
が備家の出身な
るよりいよ

見ムレ、見る
べしの配

仰の信をいたす。然れども窮屈の餘り、聊か睡眠する間、さきの童子、裝束は天童のごとくにして、御帳の中より出で来て、在衛に云ふ事は、官は右大臣にいたり、歳は八十二なるべし、其後昇進雅意に任せたり。左大臣八十三の時彼の寺に詣でて申して云ふ、往日右大臣八十二のよし示し給ふ所に、今既に如此、毗沙門又夢の中に示し給ひて云ふ、官は右大臣迄にてありしかども、奉公の勞によりて左にいたれり、命をばあしく見たり、八十七歳なり。果して件の歳薨逝せり。其後彼の寺の正面の東間をば、人以て進士の間と號す。

播磨國書寫山の性空聖人、生身の普賢菩薩を見たてまつらん事を祈請す。夢の告ありて云ふ、生身の普賢を見んと思はど、神崎の遊女の長者を見べしと。よて喜びながら神崎に行きて、長者の家を相尋ぬる所に、只今京より下りの輩あつまり來りて、遊宴亂舞の間也。長者も横座に居て鼓を打ちて、亂拍子の上句をうたふ。其詞に云ふ、周防むろづみの中なるみさらるに風は吹かねどもさよら浪立つ。其時聖人奇異の思ひをなして睡眠す

五塵六欲一五塵
は色聲香味觸
六欲は五塵に法
塵を加へていよ
なるべし

大御室一性情
三條天皇の第四
子
宿曜一星宿によ
りて運命を占ふ
道をいよ

る時、長者忽ちに普賢の形を現じて、六牙の白象に乗りて、眉間より光を出して道俗を照らす。則ち微妙の音聲をもて唱へて云ふ、實相無漏の大海に、五塵六欲の風は吹かざれども、隨緣真如の波の立たぬ時なしと。其時聖人信仰恭敬して感涙をのごふ。目を開く時は又もとの如く女人の形をなして、周防のむろづみを出す。眼を閉づるときは又菩薩の形と現じて法文を演ぶ。如此する事數ヶ度、聖人泣くく退き歸るときに、件の長者俄に立ちて閑道より聖人の所に追ひ來て云ふ、口外に及ぶべからず、即ち逝去す。時に異香室にみたり。長者頓滅の間、遊宴興をさませりと云へり。書寫上人は六根清淨を得たる人也。ある時は客人來臨せり、對面の間客人懷中に蚤をひねる時、聖人云ふ、いかにさは蚤をばひねり殺さんとし給ふぞとて、大に慙愧して客人おどろきて退去すといへり。

大御室は御壽命十八歳を限りたるよし、宿曜の勘文に見えたるによりて、十八歳の春尊勝法を修して祈りなさしめ給ふ間、ある人の夢に、閻魔王宮火付きて已に焼けんとする

間、王宮大に騒動す。件の壽命十八のよし、札の文に已に明白なりといへども、炎上難治によりて、八の字を上へ釣られたると見えたり。果して八十の御歳九月二十七日入滅し給ふと云へり。

大垣—宮城の外垣

同御室は世間に疾病おこる時は、ひそかに御在所を出で給ひて、唯一人御棚の菓子などを懐中に入れ給ひて、大垣の邊の病者に、次第にこれを給ひて、眞言をよみかけて、過させしめ給ひければ、病者立ちどころに滅を得たり。御所にかへり入らせ給ふときは、玉の輿に乗り給ひて、天童等多く御供にて入らせ給ふと見奉る人あり。

小野皇太后—歌子
大二條關白—教

しかしより「しかりしより」の訛

小野皇太后宮は後冷泉院の後、大二條關白の三女也。生年十四の年、舎兄靜圓僧正にしたがひて、ひそかに法華經を受け給ひて、毎日一部讀誦し給ふ、人曾て知ることなし。春秋十六にて入内あり、治曆四年四月十九日立后、此夕帝崩御し給ふ、しかしよりこのかた偏^{ひな}に道心を發して、念佛轉經の外に他事まします、二條東洞院の亭にてみづから最勝王經を書寫し給ふ。或時雲雨俄に降りて霹靂殿に入る、皇后經と筆を手に握り給ひ

承曆—白河天皇の御世
長秋—皇后の宮殿を唐にて長秋宮といふ

御堂關白—道長

決定—きつと

て、存せるがごとく亡せるがごとし。即時雷あがりて天晴れたり、眼を開きて經を見給へば、空しき紙は焼けて文字は焼けず、御衣は燃えたれども身は恙もまします。法に歸する志是によりいよく深くまします。承曆元年に飾を落して出家あり、良眞座主を戒師とし給ふ。一たび小野の寒雲に入りしより、再び長秋の曉の月を見ず、往生の素懐を遂げ給へりとなん。

清範律師は播磨國の人興福寺の法相宗也。空晴僧都の法孫守朝已講の上足、說法無雙にて文珠の化身といはる。不思議なる事あけて計ふべからず。御堂入道殿實否を知り給はんとて、佛事を修し百僧を請ぜらる。僧の座には皆半疊を設けらる。一の半疊に文珠と書きたる札を、へりの中に隠して百座に敷きまじへらる。此律師吾座は候ふとてかき分けて、此半疊に坐せられたり。其後決定文珠化身とは知り給へり。卅八にて遷化、清水寺の上綱と號せり。

參河守大江定基は參議左大辨濟光と云ふ人の子也、出家して寂昭と云ふ。この人渡唐し

て諸の聖迹を禮す、僧供を受くるとき、寂昭鉢の飛びて物をうくる事あり、五臺山に詣
でて、文珠の女と化せるを見る。圓通大師の號をさづけらる。

内記慶滋保胤は陰陽師賀茂忠行が子也、博士の子と成りて改姓す。發心出家の後世に内
記聖人といへり。

四條宮一關白賴
實公の女
ごき一四女

惠心僧都の頭陀づた行ぜられける折に、京中にこぞりていみじき御ときまうけて、まるりに
しに、四條宮にはうるはしく銀のごきどもを打たせ給へりしかば、かくてはあまり見苦
しとて、僧都乞食とめ給へりと云へり。

○此話大類にい
關白殿一圓通

河内國そこくに住むなにかし聖は、庵より出づる事もせられねど、後世の責を思へば

入道願一道長

とて、上り参られたりけるに、關白殿まるらせ給ひて、雜人ども拂ひのよしるに、是こ
そは一の人におはすめれと見奉るに、入道殿の御前にるさせ給へば、猶まさらせ給ふな
りけりと見奉る程に、亦行幸なり、亂聲らんじやうし待ちうけ奉らせ給ふ様、御輿ぐんこしの入らせ給ふ程

亂聲一音樂を打
脚すをいふ

など、見奉る殿たちの畏まり申させ給へば、國王こそ日本一の事なりけれと思ふに、お

中尊一左右に觀
音勢至ありて其
中央にある阿彌
陀をいふ

りおはしまして、阿彌陀堂の中尊の御前についでるさせ給ひて、拜み申させ給ひしに、猶
猶佛こそ上なくはおはしましけれと、此會の庭にかしこ結縁し申して、道心なんいとど
すぐし侍りぬるところ申されしか。

書寫の聖結縁經供養し侍りけるに、人々餘多あまた布施を送りける中に、遊女宮木あやぎが奉れるを
聖思ふ心や有りけん、しばし取らざりければ、宮木よみ侍りける。

津の國のなにはの事か法のりならぬあそびたはむれまでとこそ聞け

神道類

佐理の大貳任はてて、鎮西より上るとき、伊豫の國の泊とまりにて風波悪しくて、舟を出す事
あたはず。其夜の夢に、三嶋明神社の額をかよせんとて留め給へる事見えたり。則ち神
の御前にて額を書きてうたせれば、順風に成りて煩ひなく著岸せり。日本第一の能書
也。三嶋社の額と六波羅密寺の額とは、此人の筆跡也。

ありとはしー有
りと屋、蟻通

放生會一男山八
體の也
延久一後三條天
皇の御世
靴一儀式に用ふ
る革製の紐ある
をいよ
貞信公一忠平

紀貫之集に云ふ、紀伊國に罷り下りて罷り上るに、馬の煩ひて死ぬべきあつかひを、路ゆく人々とまりて見て云ふ様、例ごとくいまする神のし給ふとて、かく社も無くしるしも見えねど、心いとうたておはする神也、さきくも祈を申してなんやむと云ふに、みてぐらも無ければ何わざをすべきにもあらず。いかどはせんとして手ばかり洗ひ跪きて、さても何の神と申さんするぞといへば、蟻通の明神となん申すといへば、かくよみて奉る。

かき曇りあやめも知らぬ大空にありとはしをば思ふべしやは
經信卿圓融院の御八講に參する時、北野の社の前にて下車せず、不審をなして問ふ人有りければ、答へて云ふ、彈正式に四位は二位を拜せずと見えたり、神は非禮をうけず、もしおりてはかへりて禮を知らざるに似たりと云へり。

放生會、行幸に准ぜらるゝ事、延久二年是始め也。上卿は大納言隆國なり。初年ばかりは壺胡籙つばやなくひ、杏を用ふ、第二年よりは平胡籙、靴に改められけり。

貞信公の御所小一條と申す所は、宗像明神のおはしませば、洞院のうしろのつじより、

車より下りさせ給へり。雨などの降る日の軒に、大路に石疊をせられたりけり。この貞信公は宗像明神現に物など申し給ひけり。我より御位高くてゐさせ給ひけるなん苦しきと申させ給ひければ、いと不便なる御事とて、神の御位はまし申させ給ひけり。

禮儀類

御即位の時代々主上の著し給ふ玉冠は、應神天皇の御冠也。禮服に相具して内藏寮に納めおかる。後三條院の御頭にめでたく合はせ給ひけり。此事つねに御自讀有りけるとな

ん。
中原師遠攝津守に任じて、知足院入道殿へ参りて慶賀を申しけるに、笏を持たずして三度拜し奉りけり。入道殿中門の連子いんじより御覽有りて仰せられけるは、猶師遠也、禪室に入るときは笏を取らずといへる者也。

參議師頼卿多年沈淪して籠居す。中納言に任じて後、初めて釋奠の上卿を勤仕す。作法

知足院入道一藤
原忠實

大廟云々一論語
八宿置「子入大
廟每事問」

進退の間、事において不審をなして、傍人に問ふ事をす。時に成通卿參議にて座に列りけるが、師頼卿に語りけるは、年來御籠居によて、公事御忘却うひくしく思食おぼしめしたる事尤も道理也。師頼卿返事をば言はずして、ひとり言ことばして云ふ、大廟に入りては事毎に問ふ。成通卿是を聞きて閉口す。後日に人に逢ひていひけるは、思ひ分くる方なうして、不慮の言を出し侍り、後悔千萬也。

法性寺の關白一
忠所

後白河院の御在位の時、絶えて久しき事ども再興せられし中に、記録所とて天下の政を行はれし事、後三條院の御時ありし後は、この御代に寄人など云ふもの餘多あまた置かれて、けにくしき事共ありけり。大内をも作りいだされて、渡らせ給ふ殿々門々の額は、法性寺の關白書かせ給ふ。宮作りたる國司七十二人勸賞行はれて、位など賜はれり。内宴とて十とせ餘り絶えたる事をも行はれて、春生はるせい聖化中と云ふ文字にて詩を作らしむ。青色赤色のうへのきぬを著せり。綾綺殿にて十人の舞姫袖ふる氣色あるべきを、俄にて誠の女は叶はねば、仁和寺法親王舞童を奉らしめ給へり。詩をば仁壽殿にて講ぜらる、

うへのきぬ一袴

やそしまのつか
ひ一難波の八十
鳥祭の使なるべ
し

尺八と云ふ笛も吹き絶えたるを、此時吹かせらる、相撲の節も此御代再興せられて、十七番あり。少納言通憲と申す人、後に法師に成りて信西と申しけるが、かゝる事共はずめ奉りて、めでたき御代にて有りけるとなん。紀内侍と云ふは法皇の御めのと也。これは信西が室也。是によりて信西によろづ打ちまかせられ侍り。やそしまのつかひと云ふ事も、紀内侍つとめ侍りて、其時よめる歌、

すべらぎの御代の御蔭にかくれずばけふ住吉の松を見ましや

二條院御位に即かせ給ひて、保元四年正月二十一日今年も内宴あり。公卿七人、四位五位十一人、文つくりて講ぜらる。序は式部大輔永範書き侍り、題は花下催もよほ歌舞、法性寺關白是を獻ぜらる。舞姫今年はうるはしき女舞にてあり、是も通憲法師神社などにて舞ども習はせ侍りけるとかや。

文一時をいふ
法性寺關白一忠
通

好色類

せうと一兄
本島一誓の宿宇

二條后いまだ内へまゐり給はざる時、業平中將忍びくゞに通ひ侍り。或時后をゐてかくし奉らんとせるを、せうと達奪ひかへして則ち中將の本島を切りけり。中將髮生えん程とて、歌枕みんなために關東に下向す。奥州の八十島に宿せる夜、野中に和歌の上句を詠する聲あり、其の詞秋風の吹く度たぐごとにあなめくくと聞ゆ。音につきて求むるに、人なし。たゞ一つのされかうべあり。明くる朝なほ是を見るに、かのかうべの目の穴より薄生ひたりけり。風の吹く毎に薄のなびく音、歌の上句に聞えけり。奇異の思ひをなす間、或人云ふ、小野小町此國に下向して、此所にて死せり、其かうべなりと云ふ。ことに中將哀に思ひて、下の句を付けて云ふ、小野とはいはじ薄おひけり。件の所をば玉作たまつくりの小野と云へるとなん。

賢子中宮は白河院の御寵愛他に異なる故に、禁中にして崩じ給へり。いまだ御惱危急の

既習一莖曹の眼
か

○此話字拾遺
物語にいづ

時も退出をゆるされ給はず、既に閉眼の後も猶抱き給ひて起ち去り給はず。時に俊明卿参入して申して云ふ、帝者菟曹の例未曾有の事に候ふ、早く行幸有るべきよしを奏す。勅答に云ふ、例は此よりこそ始まらめと仰せけり。

道命阿闍利は道綱卿の息也。其音聲微妙にて讀經の時、聞く人皆道心を發せると云へり。但好色無雙の人也。或時和泉式部の所に行きて會合の後、曉方に目をさまして、讀經兩三卷せり。さてまどろみたる夢に、一の老翁あり、誰人ぞと相尋ぬる所に、翁の云ふ、我は五條西洞院邊に侍る者也、御經の時梵天帝釋を始め奉りて、天神地祇ことごとく聽聞し給ふ間、此翁などは近邊へ近づき参る事あたはず、然るに唯今の御經は行水も候はでよみ給へれば、諸神祇も御聽聞なし、よき隙と存じて此翁は参りて、能々聽聞申して悦び存じたと云ふと見給へり。

小野宮右府實資公をば賢人のおとと申しけり。他事の賢かしこきには似ず、女の事に忍び給はざりけり。北の對の前に井あり、下女等清涼水と名付けて集り汲みけり。其中に少年

の女を見て、閑所に招き寄せて戯れ給へり。宇治殿此事を聞き給ひて、侍所の雑仕の女のみめよきを選びて、かの水を汲みにつかはす。件の女に教へさせ給へるやう、水を汲むに招引あらば参りて、其後水桶を捨てて歸り参るべしと仰せられけり。果して案のごとく招き寄せられけり。後日にかのおとど宇治殿へ参られたりけるに、公事言談の後、先日侍所の女の水桶今はかへし給はるべしと仰せられければ、おとど赤面して申すことなくして出られにけり。賢人なれども振舞に付けてははかられ給ひにけり。或時此殿の御前をこと宜しき女の通りけるを、門より走り出でてかき抱き給へりけるに、或人亦通り逢ひて車より下りてあれば、賢人の御ふるまひかと云ひたりければ、女人に賢人なしと答へて、逃げ入り給ひけり。

みちのくに紙一
禮紙

小一條のおとど師尹公の御女、村上の御時の宣耀殿の女御、御かたちをかしけに美しくおはしけり。内へ参り給ふとて、寢殿の日がくしの間に御車寄せて奉り給ひければ、御身は車に乗らせ給ひぬれど、御ぐしは母屋の柱のもとまでぞおはしける。一すぢをみち

空にかかせ
一暗闇する

のくに紙に置いて見けるに、いかにもすき見えさせ給はずとぞ申し傳へたる。御かたちのいみじくをかしけにおはしましけるに、目の尻のすこし垂り給へりけるが、らうたくうつくしくおはするを、御門いとかしこく時めかせ給ひて、かく仰せられける。

生きての世死にての後の後の世も羽をかはせる鳥となりなん

御返事、女御、

秋になる言の葉だにもかはらずば我もかはせる枝となりなん

古今二十巻を空にかかせ給へる女御にてましくしなり。

興遊類

六條の式部卿の宮と申しよは、延喜の御門のひとつ腹のおとどにおはします。野の行幸せさせ給ひしに、此宮供奉せしめ給へりけれど、京のほど遅参せさせ給ひて、桂の里にぞ参りあはせ給へりしかば、御輿とどめて先だてて参らせ給ひしに、なにがしと云ひし

六條の式部卿一
改賀親王
野の行幸一延長
八年十月十九日
の事なり

犬飼の、犬の前の足を二つながら肩に引きこして、深き河を渡りしこそ、行幸につかうまつりたる人々皆興じ給はぬなく、御門も興ありけにおぼしめ思食したる御氣色にこそ見えおはしましよか。扱山口入らせ給ひし程に、しらせうといひし御鷹の、鳥を取りながら御輿みこの鳳の上に飛びまゐりえて候ひしが、やうく日は山の端に入り方に、光いみじうさして、山の紅葉錦を張りたるやうなるに、鷹の色はいと白く、きじは紺青こんじやうのやうにて羽うちひろけてゐて候ひし程は、誠に雪すこし打ち散りて、折ふし取り集めてさる事やは候ひしとよ、身にしむばかり思ひ給へりし。

御堂殿の一とせ大井河にて逍遙させ給ひしに、作文の舟、管絃の舟、和歌の舟とわかたせ給ひて、その道に堪へたる人々を乗せさせ給ひしに、公任大納言遅参ありけるを、入道殿、かの大納言いづれの舟にか乗らるべきとの給へれば、和歌の舟に乗り侍らんと給ひて、よみ給へりしぞかし。

小倉山嵐の風の寒ければ紅葉のにしき著ぬ人ぞなき

大井川行幸一延
長四年十月九日
なり

西河―橋川

人皆感じける歌也。みづからもの給ふなるは、作文の舟に乗りて、かばかりの詩を作りたらししかば、名のがらん事も勝りなまし、口惜しかりけるわざかな、さても入道殿のいづれにかとの給はせしになん、我ながら心おごりせられしとぞの給ふなる。一事のすぐるよだに有るに、かくいづれの道にも抜け出で給ひけんは、古も侍らぬ事也。

延喜の御門大井河行幸に、富小路の御息所みやすみころの御腹の雅明の御子の、七歳にて舞せさせ給へりしばかりの事こそ侍らざりしか。萬人しほたれぬ人侍らざりき。餘り御かたちの光るやうにし給ひしかば、山の神めでて取り奉り給ひてしぞかし。

又圓融院大井河逍遙の時、公任卿は三船にのるともあり。帥民部卿經信卿、亦此人には劣らざりけり。白河院西河に行幸の時、詩歌管絃の三舟を浮べて、其道の人々を分ち乗せられけるに、經信卿の遅参の間、ことの外に御氣色あしかりけるに、とばかり待たれて参りたりけるが、三事兼ねたる人にて候ひき。汀に跪きて、やよどの船まれ寄せ候へと言はれける、時に取りていみじかりけり。かく言はん料れうに遅参せられけるとぞ。扱管

絃の舟に乗りて詩歌を獻ぜられたりけり。三船に乗るとはこれ也。

東齋隨筆終

内容細目

宇治拾遺物語、今物語、東齋隨筆の三種を通じて主要なる人名、地名、歌句及び話の筋に關係深き物名等を選び歴史的假名遣に従ひて五十音順に排列す

○青常の君	三〇〇	○粟田口の別當入道	四五六	○因幡國別當	一〇一
○顯光	四一六	○扇	四五一	○犬	二八五
○顯基	五〇六	○同	四五二	○同	四一四
○惡靈左府	四一六	○近江守有清	五〇九	○同	五〇一
○上綾(アゲサ)の主	三六一	○尼	二七	○犬の糞說教	一六七
○あこやの松	四九八	○蟻通の明神	五二四	○祈	八七
○葦手	四九八	○在衛	五一七	○同	三三六
○愛宕山	四一	○壹岐守宗行	三五〇	○同	三三七
○同	三三八	○生贊	二八二	○同	四三二
○東人	三〇六	○伊勢の大輔	九六	○同	四三九
○篤昌	一三九	○板風呂	四八八	○同	四三九
○阿那含果	三九一	○一乗寺僧正	一六一	○同	四三七
○粟田口	二五	○一條棧數屋	三六〇	○伊吹山	三七九
		○一條攝政	二九	○家隆	四八〇
		○和泉式部	一	○薯蕷粥(イモガユ)	三
		○同	五二二	○妹背島	一三七
		○出雲寺	五二九	○伊真綠世恒	四三六
		○同	三七六	○煎大豆	一四五
		○絲	四五六		

魚養(ウチカヒ)	四〇二	〇叡山	一四四	〇小野宮	二二五
〇鶯	五〇四	〇叡賀	三三五	〇大井河	五三三
〇牛	二八〇	〇永超僧都	一四三	〇大井光遠	五三三
同	三八五	〇惠印	三二二	〇大江定基	三七二
〇宇治殿	四〇四	〇惠心僧都	五三三	〇大江匡房	五二一
〇うちまき	一八四	〇繪佛師良秀	九一	〇大風雨	三三三
〇大秦	四七一	〇延喜の帝	三六	〇大嶽	四六
〇優婆曇多	三九〇	〇圓宗寺	一九	〇大友皇子	四三
〇馬	一四七	〇圓寛の廳	一〇〇	〇大二條殿	一六七
同	二二二	同	一七〇	〇朧月	四三二
同	二二八	オ、ヲ		〇陰陽師	六一
同	二二八	〇應天門	二七三	同	二九三
〇梅	四六一	〇小槻當平	二九二	カ、クワ	
同	四九八	〇鬼	三三	〇海雲比丘	三九三
同	四九八	同	四	〇海惠	四七三
〇占ひ	四九八	〇小野皇太后	三三〇	〇海賊	四九四
同	一六	〇小野小町	五三八	同	四三〇
〇雲林院	四二四	〇小野篁	一一五	〇戒壇	一四四
同	二九	同	五〇七		
〇永縁僧正	九八				

〇かいもち	三二	〇加持	四三九	〇鶴	三六八
〇頼顯城	三八二	〇かつみ	四九八	〇賀茂祭	四二九
〇孝謙天皇	五二五	〇桂川	三三〇	〇賀茂社	一八三
〇孝子	三四九	〇桂の里	五三一	〇粥	五九
〇柑子	二〇九	〇門部の府生	四三〇	〇唐崎	一四四
〇庚申	四二	〇金	一六	〇唐櫃	一七四
〇強盗	二七九	同	四七		
〇高野山	二八二	〇假字曆	一五五	キ	
同	四七	〇兼行	四二九	〇祈雨	四五
〇強力	三七二	〇賀能知院	一六八	〇義家朝臣	一四二
〇加賀	四六六	〇河内守頼信	三〇七	〇義親	三三八
同	五二二	〇蛙	三〇五	〇樵夫(キコリ)	九五
〇柿	八〇	〇かげれ島	四三二	同	三三三
同	四七六	〇河原院	三三七	〇起請	三〇一
〇覺猷	八九	〇甲樂城(カブラギ)の浦	八七	〇北山	三四五
〇覺縁	九九	〇鎌足	五二四	〇狐	三三
〇隱題	三四三	〇髪	五三〇	同	二〇
同	四九九	〇監河侯	四四五	同	二二
〇神樂	二五一	〇顔回	四四九	〇紀貫之	三三
〇春日祭	一五五	〇坎日(カンニチ)	一五六	同	三三
〇春日山	四七五	〇早魃	四七五	〇紀友則	三三六

○紀内侍	五三七	○くうすけ	二五八	○観音	一八五
○紀用經	四九	○空也上人	三三七	○寛朝僧正	一七八
○吉備真備	五〇五	○櫛	四五四	○灌佛院	三九六
○貴布根	五二二	○藥湯	一八五		一四一
○禁獄	四四四	○弘誓深如海	一八〇		
○公任	五三二	○弘誓房	四八七	○けいたう房	八七
○金峯山	四七	○藤小路	四三	○騎慢	四四九
○京極太政大臣	四六五	○下文	四三六	○華嚴會	五八九
○京極中納言	四六二	○蛇(クチナハ)	二九	○源覺	二三七
○行成	五〇三	○同	一七八	○源氏物語	五〇一
○經袋	二九六	○同	二八二	○支上	四七九
○京童	二〇六	○同	三九八	○支契三藏	四九一
○清瀧川	三八八	○國俊	八九	○源泉僧都	三八六
○清水寺	一三七	○倉	二三五	○遣唐使	五一七
○同	一七七	○藏人少將	六〇	○同	四〇二
○同	三二二	○鞍馬寺	五一七		
○同	四七四	○栗	四三三		
○清見原天皇	四三三	○吳竹	四九九		
○桐火桶	四三三	○火界咒	三八九		
○記録所	五二六				

○同	三四八	○五條の天神	八〇	○貞敏	四九二
○同	四四六	○琴	四九六	○貞文	一六
○孔子たふれす	四五〇	○小藤太	二四	○佐渡の金	一三三
○興正僧都	四四二	○後徳大寺	四三	○佐渡國	一三三
○興福寺	五一四	○瘤	四	○實方	四九八
○金(コガネ)	一一三	○御幣紙	一八三	○同	四九九
○金の榻	四〇三	○是季	二七	○實定	五〇三
○胡國	四二六			○實綱	五一
○穀斷の聖	三四二	○西行	四八二	○實資	五二九
○極樂寺	四三三	○同	四六三	○三舟	五三三
○黒龍寺	一一一	○相應和尚	四三八	○算術	五三三
○五色の鹿	一九六	○莊子	四四五	○三條中納言	四一七
○小式部内侍	八六	○葬送	一〇六	○三條皇太后	三三八
○同	一六七	○嵯峨帝	五〇七	○佐理大貳	五三三
○同	四七一	○櫻	三三	○猿澤池	三二二
○後拾遺集	四八一	○同	四九七	○猿丸	二八二
○後白川院	四六三	○佐多	二五		
○同	五二六	○貞重	二〇〇		
○後朱雀院	一四〇	○貞孝	四〇四		
○五峯山	三九三		二九一		
○五條道祖神	一				

○慈惠僧正	一四四	○心譽僧正	一八	○呪師小院	一六三
同	三三	○下野厚行	五四	○呪詛	二九三
○鹿	一四	○下野武正	三三	同	四一四
同	一九六	同	四八三	同	四一六
○慈覺大師	三八二	○性空聖人	五二八	○術	五〇二
同	四九二	○靜觀僧正	四四	同	二四三
○式神	三〇五	同	四六	○承香殿女御	四一八
○式成	二九	○上西門院の兵衛	四六〇	○舜	四四九
○式部大輔實重	二四一	○淨藏	二七九	同	四九六
○慈鎮和尚	四六	同	四九五	○承久の亂	四八五
○實賢	四六	○上東門院	一六七	○白河院	一四二
○實子	一五	○聖實僧正	三四〇	同	四九二
○しとき	一三三	○釋迦	四四五	○白河法皇	三二〇
○死人	五四	○寂昭	五三一	○白壁王	五〇五
同	一七三	同	三八六	○白馬	一九一
○四の宮河原	一四六	○尺八	四九二	○新羅	九三
○十羅刹	二九八	同	五二七	同	三三〇
○鹽籠	三三七	○舍利	四七	○隨求陀羅尼	二
○信西	五二七	○受戒	三三	同	四〇三
○泰始皇	四四	同	三三		
○進命婦	一三七	同	三九四		

○水飯	二〇四	○清明	六〇	○僧伽多	一八九
○水龍	四九二	同	三〇五	○增譽	一六一
○季直	三四三	同	四一四	○即位	五二五
○修行者	二九	○清涼殿	五〇一	○蘇生	一三九
同	四六一	○世尊寺	四九九	○袖くらべ	一四六
○輔親	五〇三	○説經師	一七三	○卒都婆	七二
○雙六	一七七	○法説	四八八	○尊勝陀羅尼	二四一
○朱雀門	七五	○蟬丸	一六六	○染殿の后	四三
同	九四	○宣耀殿女御	四九三	○空入水	四三八
○洲股の渡	一〇八	同	五三〇	○大安寺	二六八
○周防内侍	四二四	同	四八三	同	二六八
○住吉	四八〇	○瞻西上人	五二二	○大學の衆	五二五
○相撲	七五	○千手院	四六五	○大饗	七五
同	三九八	○善政	二四一	同	三二
同	五二七	○千僧供養	五二二	○大宮司	二二五
○清徳	四一	○禪珍内供	三二〇	○待賢門院の堀川	一〇三
○清範	五二	○増賀	三六	○帝釋	四六〇
				○大太郎	一七五
				○大童子	八二

○提婆菩薩	三三〇	○忠度	四五二	○同	一六六
○たうさかのさへ	三三六	○多田満仲	一〇〇	○同	四一一
○道慈律師	五一五	○橋	五〇〇	○忠仁公	二七三
○盜跖	四四六	○橋以長(コレナガ)	一四八	○智海法印	一四二
○道摩法師	四一六	○同	三三〇	○持經者	三三五
○道命	一	○橋季通	六三	○畜生	二〇〇
○同	五二九	○同	五〇一	○竹生島	五二〇
○鷹	五三三	○橋俊遠	一四八	○竹豹	一五三
○鷹飼	一七九	○橋長政	四八八	○地獄の迎	一六
○隆祐	四五八	○橋直幹(ナホモト)	五〇八	○地藏	二七
○高忠	三四四	○橋則光	三二六	○同	一〇〇
○高階俊平	四一七	○狸	二四一	○同	一〇一
○財(タカラ)	三四九	○田原	四三三	○同	一四六
○蕭物(タキモノ)	二二七	○鯛の苞苴(アラマキ)	四九	○中山	一六八
○竹隈の松	五〇一	○珠	四〇四	○地震	二八二
○たけの大夫	九六	○玉作の小野	五三八	○地主権現	七四
○武正	四三九	○達磨	三三九	○知足院入道	一六六
○忠明	二〇六	○血	七三	○千鳥	五二五
○糺(タラス)	四七二	○仲胤僧部	四	○除目	四六〇
○忠恒	三〇七			○長者	二九〇
○同	一三九				四三七

○長明	五〇七	○同	一八九	○敏行	二二九
○筑摩の湯	一八五	○同	一九六	○俊頼	五二〇
○つちゆいふけつ	四八八	○同	三三九	○鳥羽院	一五四
○經國	四八四	○同	三六八	○鳥羽僧正	八九
○經信	五〇九	○天王寺	四四四	○融左大臣	三四七
○同	五二四	○同	四五九	○富小路大臣	二二八
○同	五三三	○東大寺	二二二	○頓死	二九〇
○經盛	四九八	○同	二二七	○遁世	一三五
○經頼	三九八	○同	三四〇	○朝光	五〇八
○敦賀	二四九	○東北院	一三三	○豐前王	二八九
○劍の護法	二二七	○藤六	九九	○虎	九二
○テ		○讀經	五二九	○同	三五〇
○定家	四八〇	○毒龍の巖	四六	○鳥部野	三五四
○貞信公	五二四	○都卒天	四三八	○同	一〇六
○鄭大尉	三四九	○俊綱	五〇九	○内記上人	三三四
○天狗	三八二	○利延	三六七	○同	五三三
○殿上人	一四七	○利仁	三一	○永手	五二二
○天竺	一七五	○俊盛	四七五	○長門前司女	一〇六
				○中原師遠	五二五

○生侍	一七七	○盜人	六六	○箱打	四七
○鯨	三六	○同	八一	○博打(バクチ)	二七
○業遠	一三九	○同	三〇四	○同	二七〇
○業平	五二六	○布	二二	○伯の母	九六
○成通	五二六	○れ文字	二一六	○同	九八
○業村	七五	○能宣	二一	○妖物(バケモノ)	三五八
ニ		○後の千金	二九	○長谷寺	二〇六
○西宮	二五	○則員	二九	○長谷の観音	四〇四
○日藏上人	三三	○放生會	五二	○秦兼方	四八一
○二條院	五三七	○寶志和尚	二四八	○秦兼任	四六四
○二條の大宮	一五四	○放鷹樂	二七	○秦兼久	一九
○二條后	五二八	○同	二七	○秦兼弘	四八三
○日本法華驗記	一七三	○博多	四九二	○秦公春	四六〇
○仁戒上人	四一	○務垂	六六	○鉢	三八六
○仁和寺	三九六	○伯夷叔齊	四九	○鼻	五六
○女犯	三九〇	○同	四九	○鼻藏人	三二
○仁王經	四三	○同	四九	○繩	五〇三
○零餘子(マカゴ)	四七二	○同	四九	○範久阿闍梨	一五一
		○同	四九	○萬秋樂	四九四
		○同	四九	○萬歲樂	二七九
		○同	四九	○般若丸	四九三

○伴大納言	二〇	○琵琶	四九一	○伏見中納言	四六三
○同	二七三	○同	四九三	○藤	五〇〇
○針	四七	○引剝	三九七	○藤原明衡	六八
○播磨守佐大夫	二八〇	○平等院	五二六	○藤原鎌足	五〇〇
○播磨守爲家	二〇〇	○百鬼夜行	二九	○藤原定頼	八六
○保昌	三三五	○百日懺法	三〇	○藤原忠家	八五
ヒ		○兵藤大夫恒政	二六三	○藤原保昌	六六
○火	九	○日吉社	四六三	○藤原廣貴	一七〇
○同	二〇	○平茸	三	○佛事	九八
○比叡山	二二	○博雅	四九四	○佛法	三五〇
○同	三三	フ		○同	四四
○水魚	一六四	○同	二七	○不動尊	四三八
○秘曲	四九五	○同	四九二	○不動尊の火燄	九三
○瓢の種	二〇九	○同	四九三	○鮪	四四六
○久孝	三三〇	○同	四九四	○不破の明神	四二六
○毘沙門	三二九	○普賢菩薩	二三八	○振舞	三三八
○同	四六	○伏柴の加賀	四六六	〽	
○聖の鉢	三三四	○同	五二	○陪從	一五一
○櫃	一〇六	○伏見修理大夫	一〇三	○陪從清仲	一五四
○羊	三七四		一四七		

○平仲	一六	同	五〇一	○雪	四六四
○法華經	一七	○法性寺殿	三三二	○三井寺	二二六
同	二二〇	同	四三九	○三河入道	一三五
同	二九八	○法勝寺	二二〇	○みそのの尼	四六七
○菩薩	二四九	○法文	四八四	○御堂關白	四一四
同	三九三	○本院侍從	一四四	○御嶽	四七
○菩提講	二二九	○堀河院	二七	○通清	四三二
同	一三三	○堀川太政大臣	四三三	○通俊	一九
○蟹	四三三	マ	二〇	○道長	五〇一
○法花寺	五二五	○雅俊	二〇	○道則	二四三
○發心	二九四	○升	五二	○通憲	五二七
○佛	八〇	○松	四九八	○御帳の帷子	三二四
○佛供養	二五八	同	五〇一	○光清	四七二
同	二六三	○松島の上人	四八五	○水無瀬殿	三五九
○法眼	四八六	○松殿	四六六	○源貞	三六三
同	四四	○舞	四九六	○源行遠	三二〇
○法驗	四六	同	五三	○みのわ堂	五二七
同	四二	○迷神	三六七	○御室戸僧正	一六一
○法藏僧部	四二	○覺往生	三七九	○明暹	二七七
○法成寺	四一四			同	四九三

○都良香	五二〇	○桃園大納言	一七三	○雪	四六四
○宮木	五三	○衆樹の宰相	五〇〇	○弓藝	二二九
ム	二四	○師時	一一	○ゆふしで	四七二
○聾入	二七〇	○師頼	五二五	○ゆふつけ鳥	四七二
○むささび	三五九	ヤ		○湯槽	九〇
○武藏寺	三三六	○陽勝仙人	二四一	○夢	四一
○蟲	四七六	○陽成院	三五八	同	一四一
○無動寺	四三八	○焼繪	四六五	同	一六八
○宗像明神	五二四	○薬師寺別當	二二四	同	一八四
○致經	三三五	○保輔	三〇四	同	一九七
○紫式部	四七九	○八十島	五二八	同	二〇七
モ		○やそしまの使	五二七	同	三三五
○元輔	三六四	○八幡	三六七	同	二六八
○物忌	一四八	○山階寺	四九三	同	二八一
○文學上人	四八六	○山伏	一一	同	三二四
○文珠	三九三	同	八七	同	三七〇
○問答	一八七	ユ		同	三七五
○百川	五〇六	○維摩經	五二四	同	三七七
		○勇力	三九六	同	四三三

人しれず	一三〇	同	四八〇
吹き返す	九七	〇	九三
ふれや雨	四五五	〇	二〇八
みがきける	四五八		
身のうさの	四六一		
都へと	三四六		
み山出て	四八三		
昔より	九九		
紫の	四八五		
めぐりくる	三四四		
物思へば	五二二		
物かほと	四五七		
山がつの	四八三		
世の中に	四八六		
世の中の	四八五		
夜やさむき	四八七		
わかれしな	四八六		
わすられて	四五六		
我身いかに	四七九		
われが身は	二〇三		
和歌の道	四五八		

内容細目終

不許複製

昭和六年五月十日
昭和六年五月十四日

印刷 有朋堂文庫 (非賣品)
發行 宇治拾遺物語

編輯者 塚本哲三
東京府下大久保町西大久保二百三十六番地

印刷者兼 三浦捷一
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷所 有朋堂印刷所
東京市神田區錦町三丁目九番地

發行所 有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

終